

小・中学校
東京都道徳教育郷土資料集
(第4集)



葛飾北斎「富嶽三十六景 隅田川関谷の里」



小笠原村「南崎海岸」

平成22年3月
東京都教育委員会

はじめに

東京都教育委員会では、平成十一年度から区市町村教育委員会と連携して、「道徳授業地区公開講座」を実施してまいりました。この公開講座の趣旨は、次のとおりです。

①意見交換を通して、家庭・学校・地域社会が一体となった道徳教育を推進する。

②道徳の授業の質を高め、道徳の時間の活性化を図る。

③道徳の授業を公開することにより、開かれた学校教育を推進する。

この公開講座は、平成十四年度からは都内すべての公立小・中学校で実施され、平成十七年度からは都内すべての都立中高一貫教育校や特別支援学校においても実施されております。また、平成十五年度からは公開講座の一層の充実を図ることを目的とした推進委員会が設置されました。

このように、東京都教育委員会は今日まで、家庭や地域社会と一体となって推進する心の教育の普及に努めてまいりました。

平成二十年三月告示の学習指導要領においては、学校教育全体で取り組む道徳教育の要として、道徳の時間の役割と重要性が示されており、今後より一層、道徳の時間の特質を生かした指導の充実が不可欠であることは言うまでもありません。また、道徳の時間の目標の達成を図り、児童・生徒に充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるためには、道徳の時間の資料となる魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用に努めることが大切です。

本書は、都内公立小・中学校等のすべての児童・生徒に充実した道徳教育を推進するとともに、郷土や国に対する愛着や誇りをはぐくむために、児童・生徒が日常の体験を想起し実感を深めやすい地域教材を資料として開発し、道徳の時間で活用する「東京を題材とした読み物資料集」を活用例とともに編集したものです。

各学校においては、第1集（平成十七年度発行）、第2集（平成十八年度発行）、第3集（平成二十年度発行）及び本書第4集を活用し、道徳の時間の一層の充実が図られますよう期待しております。

終わりになりますが、本書の編集に当たられた道徳授業地区公開講座推進委員会の皆様、資料提供をしてくださいました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成二十二年三月

東京都教育委員会教育長

大 原 正 行

第二章 郷土資料の活用

小学校低学年用

一	こまつた	ちゆんきち	1 (1)	・	108
二	すいぞくえんの	なかよし	2 (3)	・	109
三	絵手紙 <small>えてがみ</small> の	メッセージ	2 (4)	・	110
四	ぬくもりの	きょうしつ	4 (1)	・	111

小学校中学年用

一	オオカミの	おんがえし	2 (2)	・	112
二	大鵬 <small>たいほう</small> 土俵 <small>どひょう</small>		2 (4)	・	113
三	二時間 <small>てんいん</small> 店員		4 (2)	・	114
四	けんたの	じまん	4 (2)	・	115
五	だつて	家族 <small>かぞく</small> だもの	4 (3)	・	116
六	北齋 <small>ほくさい</small> 通り <small>どお</small>		4 (6)	・	117

小学校高学年用

一	より良い物を	目指して	1 (2)	・	118
二	いまやらねば	いつできる		・	
	わしがやらねば	たれがやる	1 (2)	・	119
三	ロード	レース大会の	思い出	2 (3)	120
四	ふるさとの	川	3 (2)	・	121
五	ぼくたちの	ほこり	4 (6)	・	122

中学校用

一	歴代 <small>れきだい</small> 横綱 <small>よこづな</small> の	碑 <small>ひ</small>	1 (5)	・	123
二	心を	届ける	2 (3)	・	124
三	幻 <small>まほうし</small> の	梨 <small>なし</small>	2 (6)	・	125
四	最後の	楽園を	守れ	4 (1)	126
五	ホタルの	里	4 (4)	・	127

第一章 郷土資料

こまった　ちゆんきち　（福生市）

すずめの　ちゆんきちは、ふっさしに　ある　やなぎや
まこうえんの　大きな^{おお}　けやきの木^きに　すんで　います。

「きょうは　へやの　そうじですよ。」

おかあさんが　いいました。

ちゆんきちは、かたづけが　だいきらい。

「やだやだ、ともだちの　ちゆんたと　こうえんで　あそ

ぶやくそくを　しているんだもん。」

「ちゆんきちの　おへやは、ちらかっていて　ぐちゃぐ

ちゃよ。かたづけてから　あそびに　いくんですよ。」

おかあさんが、そういったのに　へんじも　しないで

こっそり　いえを　とびだしました。

こうえんでは　ちゆんたが　まっぺいました。

楽しくたの いっしょに あそんでいると ちゆんたが
いいました。

「そうだ、ちゆんきちくん、このあいだ かしてあげた
おもしろいかたちの さくらんぼのたね、もう、いい
かげんに かえしておくれよ。」

「あっ……。そうだった。ごめんごめん。わすれていた
よ。」

あわてて、あやまりました。

ちゆんたは、

「えっ？」

と いうと、げん元気のきない かおに なって しまいまし
た。

だい大好きな ちゆんたが そんな かおを するので
ちゆんきちは、あわてました。

「ちよっと まってて。いますぐ いえに かえって

もってくるから。かならず まっててよ。すぐだから。」

いえに かえると ちゆんきちは 大いそぎで さくらんぼの たねを さがしました。しかし、へやの なかは ちらかりほうだいで、たねは いくら さがしても 見つかりません。日は どんどん くれていきます。ついに 見つからず、お日さまは にしの そらに はずんで しまいました。

「どうしよう……。ちゆんたくん……。」

つぎの日。ちゆんきちは ちゆんたの いえへ あやまりに いきました。ちゆんたは ゆるしてくれました。「ぼくのおへやで あそぼうよ。」と ちゆんたに いわれた ちゆんきちは、ちゆんたのへ

やへ いきました。

ちゆんたのへやは、びっくりするほどきれいにせ
いとんされていました。

木のたなには、ちゆんきちがあげたちいさなま
つぼっくりが、きちんとかざってありました。

ただのまつぼっくりなのに、なんだかすごいたか
らものに見えました。

ちゆんきちは、いえにかえるといそいでへやを
かたづけはじめました。

（橋本 ひろみ 作）

すいぞくえんの なかよし (江戸川区)

クマノミくんは、元気 いっぱい。

きょうも、かさいりんかいすいぞくえんの すいぞうの
中をおよぎまわります。

クマノミくんは、イソギンチャクさんと、とても なか
よし。うごけない イソギンチャクさんに、たくさんの
ぼうけんのはなしをします。

イソギンチャクさんも、クマノミくんの おはなしをき
くのを楽しみにしています。

「ねえ、おこうにきれいなおさかなが いるんだよ。」
「ずっと上にいくと、ひかりが きらきらしていて、と
てもきれいなんだ。」

クマノミくんは、およぎつかれると、イソギンチャクさ
んのベッドで おやすみします。

ときどき、イソギンチャクさんに ちょっかいをだすさ
かながくると、

「やめなよ。」

と行って、おいはらうことも わすれません。

「クマノミくん、あまり とおくへいくと あぶないよ。

大きなさかなに たべられてしまう。」

イソギンチャクさんは、元気なクマノミくんを、いつも
しんぱいしています。

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。ぼく、すぐに にげられ
るよ。」

「なにがあっても、しらないからね。」

クマノミくんは、きこうとしませんでした。

いつものように すいそうの中を ぼうけんしていると、

とつぜん 大きなさかなが、口くちをあけて クマノミくんに
ちかづいてきました。

「おいしそうな クマノミだ。たべてしまおう。」

「うわあ。」

クマノミくんは、いっしょうけんめい 小ちいさなひれを
うごかして にげようとしませんが、大きなさかなは、もの
すごいスピードで おっってくるので クマノミくんに
おいつきそうです。

「クマノミくん、さあはやく わたしの中に かくれるん
だ。」

イソギンチャクさんは、いつもよりも 手てを大きく う
ごかして、クマノミくんを よびました。

「イソギンチャクの手には、どくがある。ざんねんだが、
クマノミは あきらめよう。」

大きなさかなは、はなれていきました。

「イソギンチャクさん。」

クマノミくんは、イソギンチャクさんに そっと ほお
ずりをしました。

そして、イソギンチャクさんのために、きょうも ぼう
けんの はなしを するのでした。

（茂呂 佳江 作）

絵手紙のメッセージ (狛江市)

夏休みのことです。ぼくは おかあさんと おねえちゃんといっしょにおや子絵手紙教室に さんかしました。

ぼくの すんでいる こまえ市は、絵手紙をかくのが さかんで、たくさんのさくひんが ゆうびんきよくやおみせに かざってあります。それに 町をはしる こまバスの中には 絵手紙が かざられています。

ぼくは おねえちゃんがかくのを見についできただけでしたが、絵手紙の 先生が、「いっしょに絵をかこう。」



と ぼくに こえをかけてきました。

絵をかくの が にがてなぼくは、おかあさんのうしろに
かくれましたが、おかあさんが、

「まさひろも やってみなさいよ。」

と いったので やってみることにしました。

（なんの絵をかこうかな。）

と まよっていたときに ふっと まっかなトマトが
目にとまりました。

ぼくは トマトをかくことに きめました。

それには こんな おもい出があります。

五月に 二年生は クラスごとに トマトをうえまし
た。うえるときに 学校のちかくに すんでいる小松さん
が トマトのなえの うえかたや そだてかたを おし
えてくれました。

それから　まい日にち　日にっちよくが　水みずやりをするに
しました。

ぼくが　日にちよくのときのことです。

二十にじゅうふん休やすみに　水みづやりをしようと　じょうろをもっ

て　はたけへ　いきました。すると　小松さんが　はたけ
で　草くさとりをしていました。ぼくは　小松さんに、

「なんで　草くさとりをするのですか。」

と　ききました。

小松さんは、

「草くさとりをしないと、土つちのえいようが　草くさに　とられてし

まうからだよ。だから　たまに学校がっこうにきて　草くさとりをす

るんだよ。せっかく　うえたトマトが　元げん気きよく　そだ

っているのか　しんぱいだからね。」

と　いいました。

（小松さんは、ぼくたちのために　トマトが　よくそだつ

ようにおせわをしてくれているんだ。)

と ぼくはおもいました。

七月しちがつになりました。小松さんのおかげで、ぼくたちのはたけには、大きくおお赤あかくなってきたトマトがたくさんできてきました。

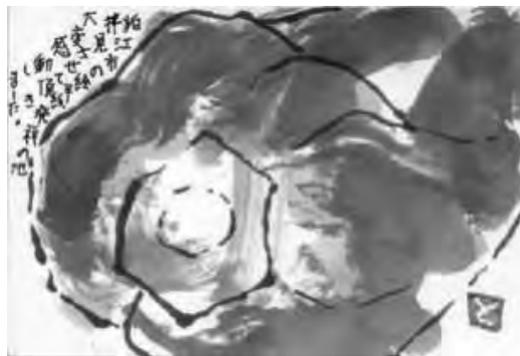
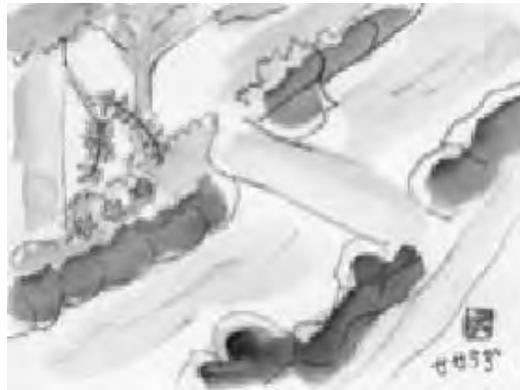
こんなことをおもい出しながら、ぼくは白いしろ絵手紙の紙かみにまるくまわりのせんをかきました。そして、みどりいろでへたをかいて赤くいろをぬりました。

絵手紙の先生に、

「うまくかけたね。こんどはことばをかいて。」
と いわれました。

ぼくは、トマトのまわりに大きくこころをこめて、
「小松さんありがとう。」
と かきました。そしてきっ手をはってポストに絵手

紙をいれました。



(安倍 威 作)

こま^えし 猫江市の絵手紙ギャラリーより

ぬくもりの きょうしつ (檜原村)

「ねえねえ、つくえに いたずら してみない？」
じょうぎを もった いたずらさきの かんたが、ゆう
たに いいました。

ゆうたは、どきつとして、へんじが できませんでした。
そのとき、休み時間の チャイムが なりました。
かんたも ゆうたも 元気よく こうていに 出てい
きました。すると だいくさんの トラックが 木をつん
で みちを はしっていくのが 見えました。

ゆうたの 学校は、ひのはら村に あります。山に か
こまれ、水の きれいな川が ながれています。
ひのはら村に すむ人たちは、みんな なかよしです。
バスの うんてんしゅさんは、村のみちを おじいさんが

ゆっくりと わたりおえるまで、にこにこと とまって
まっています。

ちゅうがくせい 中学生が やってきて、しょうがくせい 小学生に ほん 本をよんでくれま
す。みんな、手をつないだり ぶらさがったり、 おお 大よろ
こびです。

村のおじいさん、おばあさんは、山でとれた 木のつ
るで かごの あみかたを おしえてくれます。みちで
あうと、えがおで こえをかけて くれます。ゆうたは、
そんな ひのはら村が だい 大すきで
す。

しかも、ゆうたの しょうがっこう 小学校は、き
ょうしつに はいると ふうんと、
とてもいい 木のおいがしま
す。きょうしつの かべも ゆかも
つくえも いすも ひのはら村に



はえていた ひのきや すぎの木で つくられて いる
のです。

村の うでのいい だいくさんが つくってくれた
きょうしつです。

お金^{かね}が かかりますが、村の 人たちは、
「ひのはら村の 子どものために。」

と とくべつに よういしてくれました。

まい日^{いち}つかう きょうしつは、木のぬくもりで いっぱ
いです。ゆうたが ふしぎにおもうのは、とくべつせいの
きょうしつに なってから、もう なん年^{ねん}も たつのに、
ゆかも かべも つくえも いすも まだまだ きれい
なことです。

休み時間が おわりました。

また、かんだが ゆうたに いいました。

「ねえ、先生せんせいが　くるまえに　ちよっとだけ　つくえに
いたずらして　みようよ。」
ゆうたは、はっきりと　いいました。
「そんなことしちゃ　だめだよ。」
かんたは　だまって　下したをおき、じょうぎを　しまいま
した。

そうじの時間に　なりました。

ゆうたは、いつもよりも　がんば
って　ゆかのからぶきを　しまし
た。　ぴかぴか　ひかったように
見えました。

みんなのつくえも、ていねいに
ふきました。

（この木は、あの山に　はえていたのかなあ？）



まどから山を見あげました。

山の木が、ひのはらのかぜにふかれて
て、ゆうたに はなしかけているようでした。
みんなでゆれ

（橋本 ひろみ 作）

オオカミのおんがえし (日の出町)

日の出町ひでまちにある勝峰山かつほうやまのふもとに、五兵衛ごへいじいさんとコウばあさんがくらししていました。

秋も深ふかまったある朝のことです。コウばあさんが目をさますと、えんがわで、

「うっ、うっー。」

というくるしそうな声がします。

コウばあさんがそっと近づいてみると、オオカミが一ぴきいました。よく見ると、大きな口をあけて、よだれをたらしてうめいているのです。

「あれまあ、かわいそうに。はて、どうしたもんだ。」

コウばあさんは、こわごわですが、オオカミの口の中をのぞいてみました。

するとどうでしょう。オオカミのどにヤマドリやまどりのほねがささっているではありませんか。

あわれに思おもってせなかをさするうとすると、
「うおー！」
とさい後の力をふりしぼってほえてきます。

コウばあさんは考えました。うっかりオオカミの口に手を入れたら、ヤマドリのニの舞まいになってしまおう。だからといってくるしんでいるオオカミをこのままにするのはしのびない。

ついに、コウばあさんは決けっしん心しました。そして、まるでオオカミに言い聞かせるように、
「これ、オオカミ。わたしの手をかまなければ、のどのほねを取とってやるぞ。どうだ。」
と言いいました。

すると、コウばあさんのあったかい心がつたわったのでしょうか。
オオカミは頭をたれてうなずきました。

すぐに、コウばあさんは、どのほねを取り出してやりました。そのしゅんかん、オオカミはなみだを一すじ流ながしました。

それを見てコウばあさんは、オオカミに、

「これ、オオカミよ。気分がよくなったら、水を飲のんで、山に帰りなさい。」

とやさしく頭をなでながら言い、水をくんでやりました。

オオカミはあまりのいたさと安あんしん心したのとで、ぐったりとしていました。

オオカミのようすも見ていたかったのですが、コウばあさんは、五兵衛じいさんの朝ごはんのしたくがあるので家の中に入りました。

しばらくして、コウばあさんが外へ出てみると、オオカミはもういませんでした。

コウばあさんがあげた水は、全ぜんぶ部のんでありました。

「元気になったんだな。ふだんはこわいオオカミだけど、しんせつに

してあげてよかった、よかった。」

コウバあさんは、おねをなでおろしました。

それから何日かすぎた朝のことです。庭先にわさきで何か音がしました。

五兵衛じいさんが外に出てみると、おいしいごちそうがおいでありました。

「これはたまげた。どうしたことか。」

目をぱちくりしておどろく五兵衛じいさんに、コウバあさんはにっこりしました。

それは、コウバあさんだけがわかる、「のどにささったほねを取ってもらったオオカミからのお礼れい」なのでした。

二人はなかよくオオカミからのごちそうをいただきました。

（日の出町おかしばなしより 坂口 幸恵 作）

大鵬土俵たいほうどひょう

(西東京市)にしとうきょうし

ぼくが住すむ西東京市の田無神社たなしじんじやのけいだいには、土の土俵どひょうがあります。この土俵は、平成五年へいせいに「子供こどもたちに土の土俵ですもうを楽しんでもらいたい。」ということのでつくられました。

「今年のわんぱくずもうは田無神社だよ。」

とぼくのおじいちゃんが教えてくれました。

(田無神社か……)

とぼくは思いました。土の土俵はマットの土俵とはちがって、とてもかたく、たおされるといたいのです。ぼくは、

(いやだなあ。)

と思いました。

「わんぱくずもう」の日が近づいた五月のある日曜日のことです。お

じいちゃんが、

「土俵を見に行こう。」

とぼくをさそいました。本殿ほんでんの横に、土俵があります。土俵には、きれいな青いシートがかぶせてありました。ぼくが、
(どうしてだろう。)

と知っているとおじいちゃんが、

「この土俵には、『大鵬たいほう』という大横綱だいよこづなの名前がつけられていて、それは全国でもここだけなんだよ。」

と教えてくれました。

今まで、土俵に名前があるなんて知らなかったぼくは、おじいちゃんに大鵬と土俵の話を見ました。

昭和しやうわの大横綱と言われた大鵬の本当の名前は、納谷なや幸喜こうきといい、六連覇れんぱ二回、四十五連勝しよじゆうなどの記録きろくを残のこしました。特に優勝ゆうしやう回数三十二回は、まだ、だれにもやぶられていない記録だそうです。

おじいちゃんが子供のころは、「巨人、大鵬、卵焼き」と言われるほど、多くの人に愛されていました。

ぼくが、おじいちゃんに、

「どうして、そんなにすごい横綱の名前がついているの。」
とたずねると、おじいちゃんは、さらに教えてくれました。

この土俵が完成したときに、宮司さんは、

「子供たちが、健やかに育ってほしい。そのために、土をふみしめて、大地からのめぐみをいただいてほしい。今の子供たちと、これから生まれてくる子供たちのために、しっかりと土俵を守っていこう。」
と決意したそうです。そして、知り合いを通じて、大鵬親方に土俵開きをお願いし、それから宮司さんと大鵬親方の交流が始まったそうです。

親方が六十歳をおかえたのをきっかけに、宮司さんは、
「子供たちの心に残るよう、土俵に名前をつけていただけなideしよ

うか。」

とたのんだそうです。すると、大鵬親方は、なんと自分の名前を命名し、

「子供たちが、しょうらい大きくなったときに、『大鵬という土俵ですもうをとった。』と言うことを思い出として、生きる勇氣をもつてほしい。子供たちには勝ち負けにこだわらず思い切っすもうをとってほしい。」

と話したそうです。

昔は、すもうをするたびに、土の土俵をつくっていました。手入れが大変だからです。でも、この土俵は、いつも田無神社にあります。雨にぬれないように、風に飛ばされないように、日照りが続いてかわかないように、ていねいに手入れをしていかなければなりません。だからふだんは、シートがかぶせてあるのです。それでも、宮司さんたちいきの人たちは、

（子供たちのために。）
との願いで手入れを続けています。みんなでお金を出し合って、屋根をつくる計画もあります。

この土俵には、子供たちの成長を心から願う大鵬親方、そして、その土俵を守るためにかげで支えている宮司さんやちいきの人たちの願いがこめられていることを知りました。

この話を知ったぼくは、

（土の土俵はいたいから……。）

なんて思っていたことがはずかしくなりました。

（蜂須賀 勲 作）

二時間店員てんいん
(板橋区いたばし)

ゆか子の学校では、総合的な学習の時間に、毎年三年生が近くの商店街で「二時間店員てんいん」をさせてもらっています。

その商店街は、五百メートル以上もお店が続いている、区内最大の商店街です。

ゆか子は、あやかさんといっしょに洋服屋さんのたん当になりました。本当はケーキ屋さんのたん当をしたかったのですが、きぼう者が多くてなれませんでした。

いよいよ当日になりました。それぞれ集合時しゅうごうこくを聞いて、お店に行きました。

「よろしくおねがいします。」

二人であいさつをすると、お店の人はえがおで、

「よろしくね。」

と返かえしてくれました。

二人にあたえられた仕事しごとは、洋服をたたおことでした。お店の人にたたみ方を教えてもらい、店の中にある洋服をていねいにたたみ直しました。けれども、入ってくるお客さんはたたんだ洋服を次々つづつと広げてはお店を出て行きます。あやかさんは一生けん命めいにたたんでいました。が、ゆか子はいやになってきてしまいました。

「お仕事、どう？」

お店の人が声をかけてくれました。

「お客さんが気持ちきもちよく買い物をしてくれるように、わたしたちは声をかけたり、服をきれいにたたんだりしているのよ。」

お店の人がアドバイスをしてくれました。

しんけんに話を聞くあやかさんを見て、ゆか子のはっとしました。「いらっしやいませ。」

新しいお客さんが入ってきました。

「あらまあ、かわいい店員さんだこと。」

お客さんはそう言うと、お店の中を歩き始めはじました。さっき、ゆか

子がたたんだ洋服に手をのばし、何着なんちやくか広げて見ていました。

「このお洋服、すてきねえ。」

「ちようど、今日入ってきたんですよ。どうぞ、ごらんになってみてください。」

お店の人が言いました。ゆか子も、

「おにあいですよ。」

と声をかけました。お客さんはよろこんで、その洋服を買っていきました。ゆか子はうれしくなりました。

やる気が出てきたゆか子は、あやかさんと協力きょうりやくして、たたみ方をくふうし始めました。

（きらきらしているところを見せた方がいいかな、どうしたら洋服がもっとすてきに見えるかな。）

二時間は、あっという間にたちました。

「ごくろうさま。二人のおかげでお客さんもよろこんでくれたわ。ありがとう。」

お店の人が言いました。

「楽しかったです。ありがとうございました。」
お礼^{れい}を言いながら、ゆか子はっこりしました。

（山西 香織 作）

けんたのじまん
(利島村)

「けんた起きなさい、いつまでねているの。」

お母さんの声に目をさましたけんたは、まだね
おい目をこすりながら、ふとんからぬけ出しまし
た。

「お母さん、今何時？」

けんたがたずねるとお母さんは、

「七時二十分をすぎたわよ。」
とこたえました。

今日は日曜日。道そうじがある日です。
きのうの夜、おそくまでテレビを見ていた
けんたは、ねおくてちょっと頭がズキンと
するのを感じました。

□位置図

【位置】 北緯 34° 32'
東経 139° 17'

【大きさ】 面積 4.1km²
周囲 7.7km
東西 2.3km
南北 2.4km



「今朝はおくれそうだし、頭がいたいから、道そうじは休むね。」
とけんたが言うと、お母さんは、

「何を言ってるの。ちよっとおくれそうだからって、休んじゃだめでしょう。お母さんが小学生の時だって、休まずにみんなで道そうじをしたんだから。さあ、おくれないうちにすぐに行きなさい。」
と言いました。

道そうじは、利島としま小中学校しょうちゅうがっこうの子供こどもたちが数十年前からボランティア活動かつどうとして毎週日曜日の朝に行っています。

自主じしゅ的な活動てきなので、休んでもだれも文句もんくは言いません。

しぶしぶ家を出たけんたは、神社じんじやに向かいました。すると学校のみんなは、しづかに、竹ぼうきをにぎって、階段かいだんをはいていました。

けんたは、ぼうきを取りとに行つて、みんなと同じように落ちている葉はっぱや木のえだをはき始めはじめました。近くにいた中学生のリーダーのまさどが、けんたに向かつて、えがおで、
「けんた、おはよう。ねむそうだな。」

と声をかけました。けんたはおそくなったことが気になって、下を向

いたまま、まさとに、

「おはようございます。」

と小さな声で言いました。けんたは、

（おこられるかな。）

と思いました。が、まさとは道そうじの続つづきを始めました。

約やく一時間ほどで、道そうじが終わりました。そうじをしていた子供

たちが、明るい表情ひょうじょうで、

「終わったー。」

と言ってせすじを後ろにそらし、こしをトントンとたたきました。

けんたも自分たちがはいたところを見ながら、気持ちがすっきりし

たことを感じました。

何だかおくれて道そうじを始めたときの気持ちとちがいます。

そのとき、島に観光かんこうで来ていた人が、

「おはようございます。島にゴミが落ちてなくて、気持ちがいいです

ね。」

と声をかけてくれました。それを聞いたけんたの表情は、はれやかに

なりました。

けんたのお父さんも、お母さんも、中学生の時まで道そうじをして
いました。島がきれいなのはけんたのじまんです。

（安倍 威 作）

だって家族だもの
(神津島村)

「友達と遊んでくるね。」

かずきは、ランドセルをほうり投げるやいなや、家をとびだした。今日は、ゆうまとあそぶやくそくをしている。まち合わせ場所は前浜の浜辺だ。

(今日はあついから泳ごうかな。それともつりをしようかな。)

そんなことを考えながら走っていると、前の方からつりのお客さんたちの団体が歩いてきた。かずきは、すれちがいざまに声をかけられた。

「こんにちは。ちよっとおしえて。民宿はこの道をまっすぐに行ったところかな。」

(うわっ、ぼくんちだ。そういえば、ゆうべお母さんが今日はいそがしくなるって言ってたな。)

「そ、そうです。まっすぐ行ったところです。」
かずきはあわてて返事をし、また走りだした。後ろから、

「ありがとう。」

とさけぶ声が聞こえてきた。

かずきの家は、神津島こうづしまで民宿をいとなんでいる。民宿の仕事は家族だけでやっている。毎年夏になるとおおぜいのお客さんがとまりにくる。そのときは、食事やおふろのじゅんび、買い物、部屋へやのそうじなどとてもいそがしい。この前もおもしろいテレビをおちゅうでみていたとき、お父さんに、

「おい、かずき、手伝てつだってくれ。」

と言われ、しぶしぶ手伝ったことがあった。

かずきは、走りながらいそがしそうにはたらくお父さんたちのことを考えた。

(でも今日は何も言われていないや。)

かずきは、さらにスピードをあげ、まち合わせ場所におかった。

夕日にてらされ、海がきらきらかがやいている。五時のチャイムがなった。かずきは急いそいで帰りじたくをすると、ゆうまとわかれ、家に

向^むかって走り出した。

(早く家に帰らなきゃ。)

坂道をのぼっていくのはつらかったが、一生けんめい走った。

かずきの家の中から、お客さんたちの話し声や笑^{わら}い声が聞こえてきた。にぎやかな様^{よう}子^すが外まで伝^{つた}わってくる。やはり、先ほど会ったつりのお客さんたちの団体がとまっているらしい。

かずきは、うら口からそっと家の中に入った。もうすぐ夕はんのときくだ。お父さんやお母さんが食事の用意に追^おわれ、いそがしく動きまわっている。おじいちゃんはじめまんの舟^{ふな}もりをつくっている。みんな、帰ってきたかずきに気づくよゆうもない。かずきはその様子をじっと見つめていた。

かずきは急いでくつをぬいだ。そして、食^りどうに行き、コップやおさらをならべる。台所からできあがった料^り理^りを運んでいく。今日もおじいちゃんの舟もりはおいしそうだ。お父さんやお母さんはそんなかずきのすがたに気づいた。

「ありがとう、かずき。助^{たす}かるよ。」

つりのお客さんたちが帰る日が来た。かずきはお父さんといっしょにさんばしに見送りに行った。竹^{たけ}しば行きの客船が波^{なみ}にゆれている。お客さんの一人が声をかけてきた。

「とてもいい宿だったよ。それに君はまだ小学生なのに、家の仕事を手伝ってえらいね。」

（だって家族だもの……。）

そう思いながらかずきはえがおを返した。

（武田 淳 作）



北齋通り (墨田区)

両国から錦糸町に向かって、「北齋通り」という道があります。通り
にある街路灯には、たくさんの絵が飾られています。

「この赤い富士山の絵は、見たことがあるよ。」

「この花の絵は、色がすてき。」

はるかには、北齋通りの絵が大好きです。どの絵も生き生きとして、
人や動物が今にも動き出しそうです。はるかは特に、海の絵が気に入
っています。大きな波、波に負けない船、そして遠くに見える富士山。
何度見てもあきません。

(どうして、この道に絵がかざられているのかしら。)

そう思ったはるかは、お父さんに北齋通りのことを教えてもらいま
した。

北齋通りに飾られている絵はすべて、江戸時代の絵師、葛飾北齋の作
品だそうです。

葛飾北齋は、およそ二百五十年前に現在の墨田区で生まれました。

*「肉筆画」
手がきの作
品のこと。

この通りのそばで生まれたことから、「北齋通り」という名前になった
そうです。

葛飾北齋は、六さいで絵の勉強を始め、なくなる九十さいまで、版画
*や肉筆画などの浮世絵をかき続けました。

お父さんは、葛飾北齋の作品がのっている本を見せてくれました。
そして、

「はるか、ここがどこだかわかるかい。」

と言って、一枚の絵を示しました。

「ええと、大きな橋があって人がたくさんいる
わ。どこの川かしら。」

橋の上には、あふれるほどの人がいて、大き
な川にはたくさんさんの船が浮いています。

「ここはね、隅田川だよ。」

「えっ、本当。家からすぐ近くの川だわ。」

はるかには、絵をじっくり見ました。橋をわた
る人々は、みんなえがおで楽しそうです。



葛飾北齋「富嶽三十六景 凱風快晴」（墨田区蔵）

また、はるかが気に入っている海の絵は、「神奈川沖浪裏」という浮世絵だと分かりました。

葛飾北斎の本のページをめくっていたはるかが、

「へえ、すごい。富士山や日本の四季をかいた作品がたくさんあるのね。」

と言うと、お父さんは応えませんでした。

「そうだね。北斎は、日本の風景や人々の様子を、たくさんかいたんだよ。外国の画家や音楽家にも、えいきょうを与えたんだ。」

はるかは、葛飾北斎がどんな思いで絵をかいたのか、考えてみました。するとますます、葛飾北斎の絵が好きになりました。

「日本の自然や、人々の様子かあ。」

はるかは、自分が好きな日本の自然や暮らしについて、思い浮かべました。

(茂呂 佳江 作)



葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖波裏」(墨田区蔵)

より良い物を目指して (足立区)

「これ、とってもかわいいです。すごくおしやれですね。」
「江戸刺繍って、本当にきれいですね。日本の技術はすごいですね。」
母が作った江戸刺繍の携帯電話のストラップを取り、二人の若い女性がほめてくれました。わたしの母の努力が報われたしゅん間でした。



わたしの母は、江戸刺繍の職人です。祖父も同じ職人で、母は小さいときから祖父に教わりました。江戸刺繍とは、今からおよそ千四百年前から日本に伝わる伝統的な刺繍をいいます。着物にきれいな色の絹糸で模様を刺繍します。その模様は、植物や動物、家もんなど、様々あり、着物を着る人の注文によって変わっていきます。細かい作業なだけに、機械化が進んだ今も、職人さんの手作業によって作られています。

*「家もん」
それぞれの家のことを表したマークのこと。

現在げんざいでは、着物を着る人が少なくなったため、江戸刺繍の職人さんも減ってきています。刺繍をして着物として完成するまでに、きれいな水で洗あらう作業が入ります。そのためか、荒川あらかわ沿そいの足立区では、職人さんがまだ多くいます。わたしの母もその一人です。

母は、いつも家で刺繍をしています。わたしは、小さいときから母の作業をよく見ていました。ある日、わたしとの何気ない会話によって、母の江戸刺繍に対するちよう戦が始まったのです。

「お母さんの江戸刺繍って人気あるの。」

わたしは、今までに江戸刺繍のことを聞いたことがなかったので、母に質しつもん問してみました。

「そうね、まあまあかな。」

と、母は言い、さらに続けました。

「着物を着る人が少なくなったけど、着物を大事にしている人も多いのよ。着物を着る人にとっては、江戸刺繍は喜ばれているの。でも時間も手間もかかるから、値段ねだんも高いしね。日本の伝統のすばらしさを、本当は多くの人に知ってもらいたいわ。」

母の言葉にわたしは少し考えました。そして、思い切って言いまし

た。

「江戸刺繍をもっと多くの人に伝える方法はないかな。」

「そうねー。着物に刺繍をするのが基本だからね。」

「着物以外に何か工夫できないかな。こんなにすばらしい作品を、もつと多くの人に知ってもらわないと、もったいないよ。」

「何か考えてみようかしら。」

母は、江戸刺繍の新しい道を考え始めました。

（江戸刺繍だからといって、着物だけに刺繍をしなくても、良いのではないか。）

それから母は、雑貨屋さんや手芸店によく通うようになりました。お店にあるバックや小物入れなどを見ながら、いろいろ調べてみました。一度、色紙の大きさに家もんを刺繍し、額にかざる作品を作ってみました。しかし、家もんの模様が細かくなり、時間がかかってしまいました。

「これじゃ、多くの人に気軽に持ってもらえないし、作るのにも時間がかかるな。」

「でも、かっこいいよ。」

と、わたしが言うのと、母はだまって、せっかく作った作品をすぐ箱に入れ、おし入れのおくにしまっていました。

母はその後も作品を作りましたが、納得なっとくのいく作品を作ることができませんでした。失敗をくり返す中、わたしは母に、何と声をかけてよいかわからなくなり、作品づくりについては何も言わなくなりました。

わたしが部活動からおそく帰ってきたある日、げん関に母が走ってきて、わたしにある作品を見せてくれました。

それは、丸いかざりに桜さくらの模様を小さく刺繍したストラップでした。

母は、

（マスコットを変えてみれば、うまくいくかもしれない。）

と思い、早速、手芸店に出かけ、丸いかざりのついたストラップを買い、作ったそうです。

「すごくかわいいし、これいいよ。携帯電話にストラップをつける人は多いし、江戸刺繍のすごさも伝わるよ。」

と、興奮こうふんしながらわたしは言いました。

こうして母は、デパートで行われた伝統工芸品展てんにそのストラップを出展することになったのです。わたしはそのストラップを見る人の



反応はんのうが気になり、いっしょについて行きました。しかし、わたしの心配をよそに、すぐに二人の若い女性がストラップに気付き、とてもほめてくれたのです。その後、その携帯電話のストラップを見ようと、人だかりができました。

「江戸刺繍は、小さくてもきれいなね。」

「日本の文化はすばらしいわね。」

といった言葉をかけてくれる人がたくさんいました。わたしは、笑顔で自分の作品について説明する母を見て、ガッツポーズをしました。

母はこれを境に、様々な江戸刺繍の作品を作りました。鏡やけしよ
う道具を入れるポーチなど、それらは江戸刺繍の伝統を変えるもので
した。

(多くの人に江戸刺繍を知ってもらいたい。
という思いを胸むねに、母は今日も江戸刺繍にはげんでいます。

(遠藤 信幸 作)

いまやらねばいつできる

わしがやらねばたれがやる (小平市)

ぼくは、お父さんにつれられて小平市にある平櫛田中彫刻美術館に行きました。その美術館の作品は木彫りの作品で、どの作品も迫力があり、温かみもあり、とても魅かれるものばかりでした。

ぼくは、美術館にあった「田中語録」に書かれている言葉がとても気になりました。それは、
「いまやらねばいつできる わしがやらねばたれがやる。」
という言葉です。

*「たれ」「だれ」ということ。おかしは、このように書いていた。

平櫛田中の代表的な作品は、「鏡獅子」だそうです。

国立劇場に入ると、正面ホールに大きな彫刻があります。これが「鏡獅子」です。この作品は、大きく力強くきらびやかな彫刻で、だれもが心ひかれると聞きました。

ぼくは、平櫛田中という人がどんな人なのか、どんな作品があるのかをもっと知りたくなってきました。

田中は、少年のころ木彫りに興味をもち、いつか本格的に木彫りの勉強をしたいといつも考えていました。二十二才の時に、人形師の中谷省古先生から木彫りの技術や彩色の技術を学びました。この出会いがきっかけで、木彫りに生涯をかけることになりました。以来、百才をこえるまで、ずっと彫刻の世界で生きてきたのです。

日本の伝統彫刻の見本となるような作品を作りたいたいといつも考えていた田中には、（彫りたい。）

と、心に決めているものがありました。

それは、歌舞伎「鏡獅子」の獅子が、いったんあげ幕の中に入り、ふたたび花道に出て、舞台の口で、そで口をぐっとしぼり、トンと

ふんばって決める、そのひきしまったしゅん間の鏡獅子のポーズです。

「鏡獅子」の大作は、六十四才の時から作り始めました。大変な苦勞を重ね、二十二年もの長い年月をかけて完成することができました。その長い年月の間には、毎日の生活さえ苦しくなったこともありましたが。また、妻が病気で亡くなったり、モデルの六代目菊五郎が亡くな

*「あげ幕」
歌舞伎で、役者の出入り口にかける幕のこと。



平櫛田中作 鏡獅子
(小平市ホームページより)

ったりして、制作せいさくを続けられなくなる時もありました。しかし、いくつもの困難こんなんにあっても制作にだ協きょうしませんでした。でき上がった木像もくぞうは、金ぱくがおされ、その上に美しい彩色がほどこされ、まばゆいばかりにかがやきを放つすばらしいものになりました。

田中は、とても子供こどもが好きで、生まれ故郷こきやうの小学校や中学校、高校へ立派りっぱな作品をいくつもおくっていました。鏡獅子を完成させてからも、帰郷ききやうするたびに子供たちに会うために学校を訪おもとずれました。そのたびに、

（いまやらねばいつできる、わしがやらねばたれがやる。）

（これという仕事を決めたら、一生涯わき目もふらず、こつこつとやり通すことじゃ。）

と、熱い思いをこめ、くり返しくり返し子供たちを上げましてきました。実際じっさいに田中は、一つの作品に何年もかけて、すばらしい大作に仕上げてきました。ときには、一晚中ひとばんじゅう、夢中むちゅうになって作り続けたこともあったということです。

田中は九十七才の時、玉川上水の流れと静けさをとても気に入り小平の地に引っこしました。

百才をこえても、制作意欲はますます盛んで、小平の自宅には材料となる巨木を三十年分も用意していました。

「六十、七十は鼻たれ小ぞう、男ざかりは、百から百から、わしもこれから　これから。」

と、百才をこえてもなお元気に、全国で開かれる作品展などに意欲的に参加していました。また、若手の育成にも精力的にあたってきました。

平櫛田中は、百七才で亡くなるまで生涯わき目もふらず木彫りの仕事をこつこつとやり通しました。力強いのに温かく、細かいところまで、見事に彫りあげた作品からは、田中の生きざまがうかがい知れます。

田中が気にいっていた小平の家は、今は美術館となり人々に熱いメッセージを伝え続けています。

（大野 寿久 作）

ロードレース大会の思い出
(稲城市)

ぼくと武志は同じクラスの六年生。同じ地域のサッカーチームに所属している、常に同じポジションを争うライバル同士だ。十二月に入ったある日、チームの監督が、毎年こう例で一月中旬に行われている市民ロードレース大会に出ようとみんなに声をかけた。

冬休みになった。大会に出場するからには、みんなに負けたくない。特に、ライバルの武志には負けられない。そんな思いで、朝、走ってみようと思立った。

冬の朝はかなり寒い。家を出て走り始めると、真っ白な息が出てきた。こんなに朝早いのに犬の散歩をしている人や、運動をしている人がいて、何だか心強く感じた。しばらくすると、

「おーい、健太。」

と後ろから声をかけられた。ふり向くと、何と武志だった。武志も少し前から練習を始めていたという。どうせなら、毎朝いっしょに走ることにしようときそわれ、家の近くで待ち合わせることになった。

毎朝早く起きるのはつらい。きつとぼく一人だったらとっくにやめ

ていただろう。しかし、武志との待ち合わせがあるから、何とか続けて走ることができた。

いよいよロードレース大会が目前にせまってきた。武志から、「本番のレースと同じように、いなぎちゅうおうこうえん稲城中央公園のそうごう総合グラウンドからロードレースのコースを走ってみないか。」

とさそわれ、やってみることにした。練習であっても、何だかどきどきした。武志には負けたくない。

「よいい、ドン！」

武志の合図で本番と同じように自分のペースで走り始めた。ニキロメートルのコースを、ぼくはおもいきり走ることにした。なかなか好調。これだけスピードを出してもだいじょうぶだ、と思って走っていたが、だんだん息が苦しく、足も重くなってきた。すると、武志がぐんぐん追いついてきて、あっという間にぬかれてしまった。そして、ずっと先で武志がゴール。ぼくは、追いつけなかった。武志が、「健太は、もっと足が速いと思っていたよ。」

と、ひょうじょうよゆうのある表情で言った。ぼくは、歯をかみしめ、うつむいて

しまった。

それから、ぼくは、武志との朝の待ち合わせの場所に行かなくなっ
た。

数日後、武志が練習着すがたで家にやってきた。

「健太、どうしたんだ。毎朝いっしょに走ることにしたじゃないか。
体調でも悪くなったのかと来てみたんだけど。」

と心配そうに言った。ぼくは思わず、

「どうせ走ったって、速くならないし。もう走るのをやめるから。」

と強い口調で言った。すると武志は、少し考えた様子で、

「もしかしたら、この間、いっしょにコースを走ったことが原因げんいんなの

かな。その次の日からだもんな、いっしょに走らなくなったの。ぼ

くが勝ったからか。でも、ぼくが速く走れるようになったのは、健

太のおかげだよ。」

ぼくのおかげと思われていたなんて、びっくりした。武志が続けた。

「どうせ速くならないなんて言うなよ。ぼくは健太と毎朝いっしょに
走れると思うから、がんばることができたんだ。絶対ぜったいにぼくたち速

くなっているはずだよ。」

武志の言葉に、いろいろな思いがこみ上げてきた。

次の日から、ぼくは、はりきって待ち合わせの場所に行った。同じ走るのでも、今までとは気分がちがう。武志といっしょに走る朝が、とても楽しい。

ロードレース大会本番。サッカーチームの他の仲間もたくさん来ていた。武志と毎朝練習してきたことが思い出された。スタートラインに着いた時、後ろをふり向くと武志と目が合った。

（おたがい、せいっぱいがんばろう。）

そんな思いが通じたのか、たがいにうなずいた。

スタートの合図と同時に、みんながいっせいに走り出した。前を見て、とにかく走った。

あともう少しで、ゴールのグラウンドに入る。そう思った時、武志がぼくを追いぬいていった。ぼくは、武志をぬき返そうと必死になった。すぐ横にまでせまったが、武志はぐんぐんとスピードを上げていく。ついていこうとありったけの力を出したが、ついに追いつくこと

はできなかつた。ゴールに着くと、息苦しさのあまり、すわりこんでしまった。すると、武志がやってきた。

「健太、すごく速かつたな。追いつくの**に**必死だったよ。健太がいたから力が出せたんだ。今までありがとう。」

武志の差しのべた手をにぎり、あく手をした。

「ぼくも、武志の速さにはびっくりしたよ。武志に負けたのはくやし
いけれど、ここまでがんばれたのは、武志がいたからだな。」

武志は見事に入賞し、表彰台ひょうしょうだいに上った。ぼくは、そんな武志を見ながら、チームのみんなに負けないくらいおもいきりはく手をした。

「武志、がんばったな。」

ぼくはそうさげびながら、自然と笑顔えがおがこぼれてきた。

（鈴木 裕子 作）

ふるさとの川 (三鷹市)

秀雄は、野川にそった道を、友達とサイクリングをしていた。国分寺から小金井、三鷹と続くこの道には、野川公園や東京天文台の森があり、とても緑豊かなところである。

秀雄は野川を見ながら、ふと、二年生の時に、サケを放流したことを思い出した。

(あのときは、寒かったなあ。でも、サケの赤ちゃんは、元気に泳いでいたっけな。)

十二月ごろ、先生が教室にサケの卵を持ってきた。

「今日から、二年一組みんなの仲間です。野川に放すと、海で大きくなって、また帰って来るんですよ。二月まで、大切に育てていきましようね。」

秀雄は、休み時間になると、さっそくサケの卵を見に行った。サケの卵は、オレンジ色だ。小さな丸いつぶが、たくさん並んで光っている。よく見ると、卵の中にポツンと黒いものがある。くるくる動く。

目だ！もう目がついている。赤い血管もある。二、三日たつとうすい皮の中に何かが見えてきた。

「あっ、中で動いているぞ。」

「魚みたいな形をしている！」

秀雄は、サケの赤ちゃんが見たくてたまらなくなった。

それからしばらくして、ふ化。するりと皮を抜^ぬけてきた。サケの赤ちゃんのたん生だ。体はまだすきとおっている。おなかには、栄養の入った大きな赤いふくろをつけている。じっと動かない。

（これが外の世界か……。）

と、びっくりしているみたいだ。秀雄は、ガラス細工^{ざいく}みたいなサケの赤ちゃんにすいよせられるように見入ってしまった。

（ほんとうにこのサケが、あの大きな海をわたって、またもどってくるんだらうか。）

秀雄はとても不思議に思って、調べてみることにした。

秀雄の読んだ本にはこう書いてあった。

サケは、生まれた川を出発して北へ向かい、カナダの近くまで行

く。それから北太平洋をまわって、三、四年後にふるさとの川へ卵を産みに帰ってくる。

その間、移動する距離は、一万三千キロメートル以上になると言われている。

それだけの旅をしても、自分の生まれたふるさとの川にもどってくることはできる。

海には何の目印もないし、たくさん川の川が流れ込んでいるのに、サケはまちがえずに、たった一つ、自分の生まれた川へと帰ってくる。

どうしてもどってくることができるのか。において、太陽の位置、水の温度など、いろいろ言われているが、まだ謎だ。

そして、いったんふるさとの川に入ってしまうと、もう海へはもどらない。

これから先、いっさい何もたべない。

ただひたすら、卵を産む場所をめざして、川をのぼり続ける。急流、滝、岩、浅瀬、動物……、それらに勇かんに立ちむかい、傷だらけになりながらも命をかけて、川をのぼる。

秀雄の胸は、何だかいっぱいになってしまった。本には、サケが、自分の生まれたふるさとの川の清流をもどっていく写真がのっていた。たくましく、力強く飛びはねていた。

秀雄は、二年一組でかえったサケが、とてもかわいくなつた。心を込めて育てた。そして五センチメートルくらいになつたとき、いよいよ野川に返すことになつた。

秀雄は先生や友達と、サケの稚魚ちぎよを放流に行った。野川には、たくさんの方が集まっていた。みんな、今まで育ててきたサケの入ったバケツや水そうをだいじそうにかかえていた。

この日のために、サケを放流する会の人たちや近くの中学生の人たちが、野川をずっとそうじしていた。たくさんのごみを拾い、川底のよごれたどろをすくいあげていた。

野川の水は、今日はとても澄すんでいる。

いよいよ放流だ！

野川に放された稚魚たちは、たくさん仲間たちとかたまって元気

に泳いでいた。

そのかたまりは、まるでひとつの大きな魚のように見えた。やがて、下流をめざしてサケたちは泳いで行った。

「元気でね、かならず帰ってきてね。」

秀雄はそう言いながら、いつまでもいつまでも、稚魚たちに手をふっていた。

「そろそろだな。もし、サケが帰ってくるとしたら……。」

秀雄は、二年生の時のことを思い出しながら、野川の底に少しずついるいくつもの空きかんをぼんやり見ていた。

次の日曜日、朝のニュースで、サケがもどってきた川の話をしていった。

「野川にも、いつかサケが帰ってくるのだろうか……。」

秀雄は、体がふるえるのを感じた。すると、急に、野川のこと気がなってきた。

（平成8年度 東京都教育委員会

地域に根ざした道徳資料集第2集より）

ぼくたちのほこり

(東大和市)
ひがしやまとし



ぼくたちの学校には、校庭に大きなイチョウの木がある。木の高さは二十メートル、一年間になる銀杏ぎんなんの重さは、おおよそ二百四十キログラム。取れた銀杏は、全校児童に配られ、それぞれの家庭で茶わん蒸しむなどに入れて食べられる。

イチョウの木は、一九二四年に校舎こうしゃの東側に植えられた。イチョウの木はおおよそ九十才。たくさんの人が、大切にお世話をしてきた。図画工作の時間では、イチョウの木を写生した。体育の時間では、イチョウの木の周りをリレーした。夏の暑い日には木の下に行き、木のかげですずしく過すごした。この小学校を卒業した地域ちいきの人たちにとって、イチョウの木は学校のほこりだ。

毎年、十月から十一月にかけて、いつもより少し早く登校して落ち葉拾いと銀杏拾いをする。

ぼくは、銀杏拾いが大きらいだった。落ち葉拾いはまだいい。校庭の東側をはくだけだ。しかし、銀杏はくさい。四年生になってもきらいだった。ある日、ぼくは銀杏拾いをしないで、友達が拾っているのを座すわって見ていた。

「順二君じゅんじ、友達もちゃんと拾っているぞ。」

と通りかかった聡君さとしに注意された。聡君は同じ縦割たてわりり班はんの六年生だ。下を向いてだまっていると、

「しょうがないな。」

と言って、聡君は拾い始めた。ぼくは、聡君が代わりに銀杏拾いをしているのを不思議な気持ちで見っていた。

下校のとき、主事室にある洗せんたく機きのところところに、先生や地域の人たちがたくさんいた。中には、下校の中にお手伝いてんぱいにきた中学生もいた。

「今年は、すごくとれましたね。」

「うちでは、毎年この銀杏を楽しみにしているんですよ。息子も持ってきたし、今では孫まこも持ってきてくれるからね。銀杏を見ると、子供のころを思い出すのよね。」

「それ、分かりますよ。ぼくもこの季節に銀杏を見ると、秋の運動会のリレーとか小学校の友達とか、いろいろ思い出します。」
みんなは、楽しそうに銀杏をあらっていた。

（なんであんなにすごいにおいなのに、笑いながらできるのかな。）
ぼくは不思議に思った。

寒さが厳きびしくなってきた二月のある日、先生が思わぬ話をした。イチヨウの木が弱よわまっているというのだ。

「今年は残念ながら、あまり銀杏がとれないな。かれないでほしいね。」
先生のその言葉に、地域の人の悲しそうな顔がうかんできた。

イチヨウの木がかれるかもしれないという話を聞いた地域の人たちが卒業生がよく学校に来るようになった。イチヨウの木の周りをそうじしたり、晴れた日が続いたときには水をあげたりしていた。中には、木をさする人もいた。

「もう銀杏が取れなくなるのかな。ずっと元気だったのにね。かれた

ら学校のシンボルがなくなってしまう……。」

学校に来る人は、そんな話をよくしていた。

ぼくが五年生になった春、みんなが喜ぶうれしい知らせがあった。うわさを聞いた木のお医者さんが、イチヨウの木を治してくれることになったのだ。お医者さんはこの小学校の卒業生で、

（このまま、イチヨウの木を放ってはおけない。）

という思いで、協力してくれることになったという。お医者さんは子供たちがいない夏休みに作業をした。根をふみすぎてしまうと、木が水を吸^すえなくなり、木が弱るということが分かった。地域の人と先生たちが協力して、木の周りにさくを作り、夏休み明けからは木の下には行けないことになった。

さくができ、数日たったある日、校庭でドッジボールをしていると、ボールがイチヨウの木の下をこえて、中に入ってしまった。ぼくは、（少しだけなら入ってもだいじょうぶだろう。）

と思って、足を上げたが、中に入るのをやめて先生を呼び^よびに行った。

「イチヨウさん、元気になれよ。」

木の様子を見に来る人たちは、木に話しかけているようだった。

十月、みんなの気持ちが伝わったのか、イチヨウの木も元気を取りもどしてきた。

そして、十一月。たくさんさんの銀杏がなった。地域の人や卒業生は、木と銀杏を見に学校によく来た。みんなうれしそうだった。

ぼくたち五年生は、木曜日に銀杏拾いをすることになった。

「明日は木曜日です。明

日から銀杏拾いをしますが、毎週の木曜日の朝、みんなより少し早く来て、道具を出してくれる人はいますか。」

と先生がみんなに聞いたので、ぼくはすぐに手を挙げた。次の日、ぼくは学校に早く来て道具を出し、一生けん命働いた。

「前は銀杏を拾うのをあんなにいやがっていたのにどうしたの。」



と友達が聞いた。ぼくは、

「へへへ。」

と笑った。明日は金曜日。二年生が银杏拾いをする日だ。ぼくは明日の当番ではない。でも、明日も早く学校に行って、二年生といっしょに银杏拾いをしようと思う。そして、中学生になってもイチョウの木のお世話をしていきたい。

（遠藤 信幸 作）

歴代横綱の碑 (墨田区)

「相撲部からの勧誘なんて嫌だなあ。」

地域清掃をしながら、雄介はつぶやきました。今日は、年二回の両国駅周辺のクリーンデーです。

「せっかくわんぱく相撲で鍛えたんだから、続けてみてはどうだ。」
一緒に参加していた祖父が言いました。

「だって、和馬が冷やかすんだ。相撲部に入ることを……。」
言い訳をする雄介。

「友達の意見に左右されちゃいかん。部活動は自分が入るんだぞ。」
祖父にたしなめられました。

「だって、この前の大会では一回戦敗退だったんだよ。」
尻込みする雄介に、

「強くなければ入らないなんて情けないやつだな。……そうだ。この道から二つ目の緑町公園の近くに、歴代横綱の碑がある。見てくるといい。」

と祖父は促しました。

「あの碑なら知ってるよ。別に今更見たってどうにもならないし……。」

しぶる雄介を後押しするかのように祖父は続けました。

「どうせ、地域清掃の範囲なんだから行ってみなさい。」

しぶしぶ行ってみると、歴代横綱の碑は、思っていたよりも小さく感じられました。以前訪れたときは、もっと大きくて圧倒されるような印象だったのですが。それだけ自分が成長したのか。それとも相撲に対する見方が変わってしまったのか。雄介はしばらく碑の前に立ちつくしました。



「やい雄介、やっぱり相撲部に入るのかよ。」

追いかけてきた和馬がいやみっぼく言いました。

「いや別に……。地域清掃だから来ただけだよ。」
言葉をにごす雄介。

「やあい、相撲部、相撲部！」

囃し立てる和馬が憎らしくなりました。それでも、言い返すこともできずに、和馬が立ち去るのを待ちました。そして、歴代横綱の碑に刻まれた名前を一つ一つ追っていきました。

初代横綱の明石志賀之介は、身長が二百十八センチメートルとも言われている大男で名力士。反対に第九代横綱・秀ノ山雷五郎は百六十三センチメートルで一番低い身長と言われているんですが、恵まれない体格を努力でカバーした力士。中でも、雄介が心惹かれるのは第五十七代 三重ノ海でした。

三重ノ海は、中学校を卒業すると力士を目指して上京しました。しかし、力士の基準である身長に満たなかったため、工場で働きながら、自分の身長が伸びるのを半年間待ちました。ようやく六年後に入幕。その後は順調に昇進するものの、大関目前に病気になり無念の休場。三年後に大関になり、さらに三年半後に念願の横綱になりました。その後は、連続優勝も果たしました。

しばらくすると、通りかがりの敬老会の横田さんが声をかけてきました。

「君は相撲が好きかい。」

黙ったままの雄介に、

「ここに記されている歴代横綱は、それぞれ性格も体格も異なる。また、人生の波も^{*}紆余曲折^{せつ}だった。でも、一つだけ共通していることがあるんだ。何だと思う。」

と横田さんが尋ねてきました。なおも黙っている雄介に、

「それはね、どの横綱も自分のよさを最大限に生かした決まり手があるということだよ。」
と断言する横田さんの言葉には重みがありました。

* 「紆余曲折」
ものごとの事情が、いろいろと複雑に変化するようす。

「私の孫も、綱中の相撲部なんだよ。」

「あっ、僕を勧誘した横田先輩のおじいさんですね。」

ようやく口を開いた雄介に、笑顔になった横田さんは、

「家の孫も、一年生の時は迷っていたよ。小さい体を生かした決まり手は何か悩んでね。」
と言って立ち去りました。

（三年生の今となっては立派な体格をもつ先輩が、体格に恵まれずに悩んだときがあったとは……。）

雄介は驚きました。そして、

（先輩は、なぜ僕を相撲部に誘ったのだろう。）

と考えました。確かに、雄介は小さい頃から体格がよかったこともあり、

「相撲取りになれ。」

と言われてきました。町内のわんぱく相撲にも周りから後押しされて出場しました。初出場の小学一年生から小学三年生で大関になるまではトントン拍子でした。でも、雄介が四年生の冬、スキーで骨折し、二ヶ月も松葉杖の生活になって練習ができず、

「相撲はやめる。」

と家族に宣言したことがありました。しかし、祖父からのアドバイスで、

（せっかく、大関までになったのだから、横綱まで頑張ろう。）

と決意したのでした。

それからは、目標に向かってがむしゃらに努力しました。その成果もあり、五年生で優勝し横綱になることができたのです。

優勝を契機に、雄介は少し自信がもてるようになりました。強くなると練習が楽しくなり、ますます練習するようになりました。そして、六年生でも連続優勝することができたのです。

それなのに雄介は、中学校に入学した途端に相撲部への入部を尻込みしているのです。なぜだか友達の間で噂が気になってしまっているのです。

雄介はもう一度、歴代横綱の碑を思い出していました。

(あそこに名前を刻まれている横綱たちには、僕とは違う何かがある。)

どの横綱も苦労を重ねて力士になりました。幕内までにもいくつもの試練に耐え、入幕してからも、度重なる逆風に打ち勝ち、横綱まで昇進したのです。だからこそ、相撲に誇りをもち、ずっと相撲が続けられたのだと思うのです。横綱たちのことは理解できるのに、どうしても反対の方向を向いてしまふ自分の心が、雄介にも分からないのでした。

帰宅すると、去年のわんぱく相撲の番付表を眺めながら、祖父が待っていました。

「何か分かったかね。」

「別に……。」

なげやりな雄介。

「あの碑を見て何も思わないわけはなかるう。」

再度の祖父の言葉に、

「歴代の横綱のすごさに比べると僕なんか……。」

と雄介は口ごもりました。

「僕なんか何だい？ 何でもいいから思っていることを話してごらん。」

この言葉に促され、自問していることを祖父に相談してみました。

「相撲部に入るかどうかで、いろいろ考えてみたことはいいことだ。『吾日に三たび省みる』という

言葉があるように、今の自分を見つめ直すことは大切だよ。この機会に、雄介のよいところを発見することだ。自分のよさには、もっと自信をもってい。そして、そのよさを伸ばすためにどうすればよいかを考えてみることだ。」

とアドバイスしてくれたのでした。隣にいた父からも、

* 「吾日に三たび省みる」
三省。日に三度我が身を省みること。幾たびも反省すること。「論語」にある。



「友達の冷やかかしなんかには左右されてはダメだぞ。部活動への入部は自分に合ったところを選ぶことだ。」

と一言添えられました。

(僕のよさって何だろう……。)

雄介は、自問自答してみました。雄介は勉強が苦手です。特に、数学と理科が苦手です。雄介の中では得意な分野の音楽と体育だって、クラスでは中位なのです。得意と言っても、体育の中の長距離走やマツト運動はだめでした。自慢できるものと言ったら、やっぱりわんぱく相撲の優勝なのです。もちろん本物の力士になろうなどとは思っていません。でも、相撲部なんて格好悪いと考えて、これまでやってきた相撲をやめてしまうのはもったいない気がしてきました。和馬たちに冷やかされたくらいで、頑張ってきたことをやめてしまうのはよくないと感じました。

そう考えると、

「自分のよさに自信をもっていい。」

という祖父の言葉が心に大きく響いてきました。

翌朝、再び雄介は歴代横綱の碑に出かけました。そこには、横田先輩がいました。

「雄介か。おじいちゃんから聞いたよ。やっぱり雄介には相撲部がぴったりだよな。」

と先輩は言いました。

「はい。もう迷いはありません。」

きっぱりと返事をする雄介。これからは和馬に何か言われても、自分のよさに自信をもっていけそうな気がするのです。そして、明日からの相撲部での自分のことを考えるのでした。

(坂口 幸恵 作)

心を届ける (小平市)

かおりはベッドに腰掛けたまま、納得のいかないむしゃくしゃした気持ちを抱えていた。まいは幼なじみの親友だが、まいが一年前に遠くの町へ引っ越してしまい、それからかおりの住む小平市と遠くの町との間で、ずっとメールでのやりとりを続けている。

* FROM:まい SUB:相談があるんだけど
あのさ、かおりに相談があるんだけど……。聞いてくれる？

FROM:かおり SUB:どうしたの？
そんな急に改まるなんてどうしたの？
まいはわたしの友達じゃん。
何でも言いなさいよ。

FROM:まい SUB:実はね
わたしのことを悪く言う人がいるの……。わたし、どうしたらよいか、よく分からないんだよね。

FROM:かおり SUB:
それで確かめたの？

* FROM:まい SUB:RE:
それでって何？親友でしょ？
ちゃんと相談に乗ってよ。
うわさで聞いたただけだけど……。充分でしょ？
人のことを好き勝手に言ってさ。

FROM:かおり SUB:RE:RE:
うわさだけじゃよくないって。きちんと確かめなよ。
それに、まいからそんな話を聞きたくない。

FROM:まい SUB:RE:RE:RE:
かおりはわたしの味方じゃないの？
もういいよ。かおりになんか相談しない。
じゃあね。

* FROM:は、「発信者」を意味する記号。
SUB:は、「タイトル」を意味する記号。
RE:は、「返信」を意味する記号。

かおりは、まくら元のくまのぬいぐるみをぼこっとたたいた。
(何なのあのメール。自分から相談があるって言うっておいて、勝手にやめちゃうなんて……。しかも
うわさに振り回されて、自分から相談があるって言うのを悪く言っているじゃない！)
かおりは、携帯電話の小さい画面をにらみつけるようにして、感情のままにメールを入力した。

FROM:かおり SUB:まいはひどいよ

さっきのメールは何なの！？
そっちが相談したいって言ってきたんでしょ？
しかも聞いてみれば、うわさは確かめてないって言うし、まいだって相手のことを悪く言っているじゃない！
まいだって、その子たちと結局同じじゃない！
私だってそんなの聞きたくないよ！親友だからって甘えないでよ！

ここまで入力したとき、

かおりは母親の呼ぶ声に気づいた。夕食の時間だった。携帯電話を閉じ、ベッドに放り投げると、かおりは居間に向かった。

「どうしたの、かおり。そんな怖い顔して。」

かおりは、まいのことを母に話すべきかどうか一瞬迷ったが、まいのことは母もよく知っているの
で、思い切って打ち明けることにした。

自分が入力したままになっているメールのことには触れず、かおりはひとしきり話した。

母は終始かおりの目を見つめて黙って聞いていたが、かおりが話し終えると、静かに切り出した。

「それで、かおりはどうするの？」

「どうするって……。」

「まいちゃんのこと、このまま放っておくのか？」

「……わかんない。メールで言ってみたの、ちゃんと確かめたの？って。でも、うまく伝えられなく

て……。」

「言いよどんだけかおりの動揺を見逃さず、母はさらりとこう言った。

「かおり、怒りにまかせて、きつい言葉でメールを打っちゃったんでしょ。すべてを見透かしたような言葉と母の表情に、かおりはぎくつとした。

「でも……。親友だから言わなきゃいけないの。」

かおりは母に訴えかけるような目を向けた。

「あら、親友だから、気をつけなきゃいけないこともあるんじゃない？」

黙りこくったかおりを見つめながら、母は思いがけないことを言った。

「かおり、家の前にあるポストを見に行ってきた。」

急に何を言い出すんだらう。ポスト？ かおりは不思議に思った。

「……わかった。」

かおりの住む家は、小平市の中でも古い商店街に面している。バス通りからは一本奥に入った通りで、車より人通りの方が多い。かおりは家を出て、すぐ右手の酒屋さんの前にあるポストを眺めた。これがいったいなんだって言うんだらう……。

「お母さん、ただいま。丸いポストを見てきたよ。あれがどうしたの？」

「ほかの形のポストを見たことない？」

かおりは考えた。

（ポストと言えば、まず赤いことが印象的だ。そのほかには……。）

「あ、四角いポストがある。ほら、あのバス通りのコンビニエンスストアのところ。」



小平市にある丸いポスト（小平市ホームページより）

「東京中のポストは、そのほとんどが四角いのよね。古くからあるのは丸くて、四角いのが新しいの。」
「そうなの？　じゃ、あの丸いのも新しいのに変えちゃえばいいのに。」

「そう言うだろうと思った。あの丸いポストはね、東京中でどんどん置き換えられていて、丸いポストが一番多く残っているのが、小平市なんだって。郵便局で丸いポストの写真展をやっている、いろいろ聞いてきちゃった。」

「ポストの写真か。ポストが丸いか四角いかなんて、深く考えたこともなかった。」

「じゃあ、丸いポストで小平市の町おこしをやってるって知ってる？」

「知らなかった。町おこしって何？」

「町おこしっていうのは、簡単に言うと町を生き生きしたものにしようとする取組のこと。小平市の場合は、町おこしのシンボルが丸いポストなの。」

「でも、手紙なんてそんなに書かないし、携帯電話のメールの方が早くていいじゃない。」
不思議がるかおりに、母はにこっと笑ってこう言った。

「だから、あなたにポストを見に行かせたの。あのポストね、古いものを大切にしたり、人と人とのつながりは心だということのシンボルなんだって。今度、日本一大きな丸いポストをみんなの募金で作ったそうよ。外の丸いポストを見てね、人と人とのつながりは心なんだってことを、あなたに考えてほしかったの。」

かおりは黙り込んだ。丸いポストとまいの顔が、頭の中に重なり合って、浮かんでは消えた。

（親友って何だろう。私とまいのつながりって何だろう。一年前まで一緒に過ごした毎日がそうなのだろうか？　それとも、さっきまで私が半ばおこりながら打っていたメール？　それなら、さっきの私のメールには、言葉よりも何よりも、まいの顔を思い浮かべながら打った大切な何か、ちゃんとあっただろうか……。）

「……丸いポストって、なんかかわいいよね。」

かおりはつぶやいてみた。

「そうよね、人間みたいっていうか、ああいう古いものを大事にして、心のつながりで町おこしをしようとする小平市って、お母さんは好きだな。」

母の顔と、まいの笑顔と、あの赤くて丸いポストが重なって、なんだか丸ごとひっくりかえって好ましいものに思えてきた。

(最後のメールを送らなくてよかった。)

と思った。

「……お母さんだったら、どうする？ まいに対して。」

目をそらしながら聞いてみると、予想していた通りの答えが返ってきた。

「それは、あなたが考えないとね。あなたの友達でしょ？ まいちゃんも、もちろんあなたも、とて

もよい子だもの。ちゃんとじっくり伝えれば、分かり合えるでしょう？」

「うん。……ありがとう。」

なんだかほんの少し前に感じていたものが、急にどうでもよく思えた。それがうれしくて、自然と笑顔が出た。

「うん。ほら、お腹空いたでしょう？ ご飯だから手を洗っていらっしやい。」

「はい。」

返事をして洗面所に行き、手を洗いながら、かおりはまいについて考えていた。

(人と人とのつながりは心。心を込めて伝えた言葉だったら、まいはきっとわかってくれるにちがいない。だって、まいは私の、言葉だけじゃない本当の親友なのだから。そうだ、心を込めて手紙を書こう。私の文字で。メールだって便利で好きだ。けれど、たまには住所を一から書いてみるのも、いいかもしれない。)

丸いポストと、引き出しの奥にしまったきりのかわいい便せんを思い浮かべて、かおりは居間に向かった。

(松澤 亮 作)

幻の梨（稲城市）

私の住む稲城市では、「梨もぎ」や「梨宅配便」というのぼりが、八月のお盆を過ぎると街中にたくさん立てられる。特産の梨が、市場には出されずにほとんど直売所で売られるからだ。

九月の最初の日曜日、部活動の試合に必要なものを買った帰りに、私は川村さんの梨の直売所の前を通ると、

「今年もおいしくできたから食べていって。」
と、川村さんが声をかけてくれた。

その川村さんは、いつも大きな声で直売所を営業している元気なおばあさんだ。その川村さんの梨園は、江戸時代から梨を作っている古い梨園の一つである。

私がおいしく梨を食べていると、お客さんがやってきた。

「いらっしゃい。お久しぶり。」

と、川村さんの張りある声が響いた。

「予約していた、『稲城』を買いに来ました。」

お得意さんのようだった。

「お待ちしていましたよ。きつとご両親も心待ちにしているでしょう。」

川村さんは、このお客さんが毎年、両親のために、『稲城』という大きな梨を予約して買いに来ることに特別な思いを抱いているようだった。

「なかなか休みが取れなくて、今年はいつもとより二週間遅い夏休みがやっと取れました。明日から三日間実家に帰ります。」

お客さんがうれしそうに言うと、

「それは大変でしたね。でも今年のご自分でご両親に持って行けますね。ご両親はきっと喜ばれるで

しょう。」

と、川村さんは親心を伝えた。

そのお客さんが帰ると、川村さんは私に『稲城』という梨の説明をしてくれた。

「この『稲城』は、人気のブランドの品種で、食べるとみずみずしくて上品な甘さが口いっぱい広がってとてもおいしいの。大きさは、ソフトボールより大きいものもあるのよ。ほら、あそこにあるのが『稲城』だよ。」

「わあ、本当ですね。」

私は、その大きさにびっくりした。

「ただ、あの大きさだからあまり数はできなくてね。だから売ってる期間も短いし、以前は『幻の梨』って言われたときもあったのよ。」

「だから常連さんは、予約をしてから買いに来るんですね。『幻の梨』って、本当に特別な感じがしますよね。」

私は、お言葉に甘えて『稲城』を食べた。そのみずみずしさにとっても満足した。

私の満足そうな表情を見ながら、川村さんはこの梨園にまつわるご自身の話をしてくれた。

「今年七十二歳になったこの歳まで梨園を営んでこられたけど、それはいろいろな人に助けってもらったからでね。実は梨園を続けられなくなりそうなときもあったのよ。」

私は、意外な言葉にびっくりしていた。

「忘れられないのは昭和四十九年の台風で、多摩川が増水して、稲城市より少し下流では家まで流されたところもあったのよ。」

「台風で家が流されたこと、聞いたことがあります。」

「このあたりの梨園では、梨棚が壊れ、梨の木が何本も折れたり傷ついたりしてね。少したつと、病気になる木もでたの。家族や他の梨園の皆さんと力を合わせて、ひとつひとつもとに戻していったのよ。」

何も言えないでいる私に、少し重い表情で川村さんは続けた。

「家族みんなで梨園を立て直しているときに、私の不注意で、はしごから足を踏み外して右足を骨折してしまっただけ。ただでさえ梨園を早く再開したくて朝から晩まで家族で頑張っていたのに、私だけがをしたもんだから、夫と子供たちに余計な負担をかけてしまったのよ。その頃中学生だった息子と娘は、自分のできることはなんでも自分でやろうとしてくれてね。」

川村さんは、うなずいて続けた。

「息子は、台風でも落ちなかった梨の袋を取り替えたり、散らばっている枝を拾ったりして、自分のできる梨園の仕事をみつけて頑張っていたわ。そして、娘は私の家事を手伝ってくれたの。」

「家族の力ってうれしいですね。」

「梨棚の修理などの大がかりな作業は、他の梨園の皆さんと一緒に頑張ったの。だから地域全体でぶたたび梨園を復活させて、前のように梨の直売ができるようになったの。」

「地域の力は心強くてありがたいですね。」

と、私が心温まる話に感動していると、少し言葉につまりながら川村さんはさらに語った。

「私たち夫婦にとって梨園の仕事は人生そのものでね。子供が独立して夫婦だけでもどったとき、年齢を考えるとこのまま続けられるかどうか考えたときもあったわ。でも、やめるわけにはいかないから、からだが続くまでは頑張ろうと決めたのよ。その一緒に頑張ってきた夫も七年前に亡くなっってしまったけどね。」

「川村さんなら梨園をまだまだ続けられますよ。いいえ、続けてください。」

と、私は力強く言った。

「そう言ってもらえるとうれしいね。今では、会社に勤めていた息子が梨園で働きたいといってくれて、息子夫婦と二人の孫に囲まれて毎日楽しく過ごしているの。」

「優しい息子さんでよかったですね。」

「こうして守ってきた梨園だから、私は自分の作った梨をたくさんの人に美味しく食べてもらうことが生きがいなのよ。」

「こうやって川村さんの梨を食べられるなんて、私は幸せ者ですね。」
私が、もうひと口食べると口いっぱい甘い果汁かじゅうが広がった。

梨の美味しさに満足していると直売所が混み始めたので、川村さんにていねいにお礼を言って私は家に帰った。

夕方の心地よい風を感じながら家に向かっていくと、私は自然に田舎のおばあちゃんのことを思い出していた。

「ただいま、お母さん。ねえ、私って田舎のおばあちゃんに小さい頃いっぱいお世話になったよね。」
「どうしたの。いきなり。」

母はびっくりしていた。

「小さい頃、私は夏休みになると二週間くらいおばあちゃんの家に行ってたよね。」

「そうね、あなたはおばあちゃんが大好きだったしね。行っている間は、畑仕事を手伝ったりもしたけど、毎日のように山や川に遊びに行くと、よく怪我をして泣いて帰って来たわ。」

「そうだったっけ。」

「そうよ。そのたびにおばあちゃんは優しく手当てをしてくれてたのよ。まあ、お母さんも子供の頃は同じようにおばあちゃんに手当てしてもらったけどね。」

「ねえ明日、川村さんの梨をおばあちゃんに送ってあげようよ。お母さんも一緒に行こう。」

「そうね。川村さんには日ごろからお世話になっているから、そのお礼もしないといけないしね。」
と、母はやさしくほほえんだ。

私は、すでにおばあちゃんが梨を食べているようすを思い浮かべていた。

「きつとおばあちゃんも喜ぶよね。『幻の梨』を食べたら。」



(篠塚 浩幸 作)

稲城の梨 (稲城市ホームページより)

最後の楽園を守れ (小笠原村)

「結局、ここを守れるのは他でもない自分たちなんだ。」
ぼくの頭の中にこの言葉が突然、響いたような気がした。

ぼくは、移動教室実行委員会に参加していた。会議のテーマは、「移動教室のルールづくり」である。移動教室での行動のきまりや持ち物などを話し合っている。話し合いのはじめに先生は、「移動教室の『自然に親しみ、ルールを守って、みんなで楽しい思い出をつくろう。』という目的をふまえて、きみたちで話し合ってルールを考えてください。」と話した。その後は、実行委員長の晴香が進行役となって、五分前に集合することやお小遣いの金額の上限などについて話し合ってきた。

「では、最後は持ち物ね。」

晴香が意見を求めた。

「思い出づくりには、まずカメラね。やっぱり、楽しむんだから、ゲームもいいよね。」
うきうきした調子で、理菜が言った。

「それだったら、音楽プレーヤーなんかもいいんじゃない。」

優也も声をあげる。

「楽しむって言ったって、『みんなだ』ってことが大切なんだろ。だから、一人で楽しむようなものはどうかな。」

省吾が言い返す。すると、

「どうでもいいじゃないか。適当に決めておけば。」
悠輔が、

(さっさと終わらせよう。)

といった感じで言った。

「何それ。それじゃ自分たちで話し合ったことにならないじゃない。」

晴香がたまらず言い返した。

「何を持ってきたって、先生に分からなければいいんだろ。適当に決めておいて、持ってきた人は持ってくればいいんだ。」

悠輔が、

(当たり前前だろ。)

といった感じですぐさま答えた。

悠輔のこの言葉を聞いたとき、ぼくは、あの言葉が聞こえたような気がしたのだった。

それは、この夏休み、釣り好きの父に連れられて行った小笠原諸島・母島での出来事だった。その時の様子は、ぼくの頭の中に、今でも鮮明に残っている。

「釣るぞ。母島では、幻の魚とも言われるイシガキダイが釣れるんだ。しかも大物だ。」

父は行く前から、イシガキダイのことで頭がいっぱいなようだった。

小笠原諸島は、東京から南へ約一〇〇〇キロメートルの位置にある、自然がとても豊かな島々だ。竹芝栈橋からフェリーで二十五時間で父島に着き、そこからフェリーを乗り換えて、さらに二時間かけて母島に着く。一日半の行程だ。そして、やっと三日目の朝から待望の釣りに出かけることができる。

「今回の釣り旅行は六日間だが、実際に釣りができるのは今日と明日の二日間だ。張り切っていくぞ！」

父は、朝から気合が入っている。ぼくたちが泊まっている釣り宿のご主人の平賀さんに連れられて、釣場へ着くと、平賀さんに教えてもらいながら準備を進めた。

「イシガキダイのえさは、ウニを使うんだ。二十年くらい前は、小笠原では、磯釣りをやるうなんて発想はなかったから、釣りのえさにウニなんて使っていなかった。だから、本州や伊豆七島辺りでは、今ではもう大物は釣れなくなったイシガキダイも手つかずのまま残っていたんだ。」

「最近はどうですか。」

父が少し心配そうにたずねた。

「大丈夫さ、今でも大物が釣れるよ。まあ、十年前に比べたら、セキログラムを越す大物は、アタリが少なくなってきたがね。でも、ほかの島々では、たった数年で、釣り師がイシガキダイを釣りつくして、釣れなくなったのに比べれば、小笠原は十分に保っていると言えるんだ。」

「どうして小笠原は、十年釣ってもなくならないんですか。」

不思議に思っただけは平賀さんにたずねた。

「小笠原が本州から離れている、ってこともあるけど、それには秘密があるのさ。まあ、釣ってみればわかるよ。」

とぼくではなく、父を見てニコツと笑った。父も笑顔でうなずいていた。

最初は、いろいろ話しながら竿をたれていたが、しばらくすると三人とも無口になった。アタリが来たと思って父が、

「キタッ！」

と大声をあげたが、空振りに終わった。

「イヤー、キタと思ったんだがな。」

とニコニコしながら、えさを付け替えて、再び同じ場所に釣り竿を向けた。

そんなことが何回か繰り返されたころ、

「キタッ！」

と、また父が声をあげた。しかし、今度は、



南崎海岸（小笠原村ホームページより）

「キタ、キタッー、すごい引きだ！」

とさらに大きな声で叫び続けている。

本当にキタようだ。平賀さんも近くに来て父にアドバイスを送った。

イシガキダイが波間から釣りあげられた瞬間は、ぼくも自分のことのように、

「ヤッター。」

と叫んでいた。父も大喜びだ。ゆうに五十センチメートル以上はある。十分に大きい。ぼくはイシガキダイを初めて間近に見た。形はイシダイに似ているが、イシダイのような縞模様ではなく、黒い石垣のような斑点がある。父は、

「おい貴之。写真だ。写真を撮ってくれ！」

と大はしゃぎだ。そして、満面の笑みを浮かべて写真に収まった。

そのあと、父は、釣ったイシガキダイの重さを測った。そして、平賀さんと二言、三言、言葉を交わしたかと思うと、突然イシガキダイを持って海に向かい、

「さらば第一号。もっと大きくなって戻ってこい！」

と言いながら、せっかく釣ったイシガキダイを海に投げ返してしまった。

「何すんの。お父さん！」

「あと二百グラム。おしかったな。でもこれが、小笠原のイシガキダイが釣りつくされない秘密なんだ。バグリミット・ルールと言ってね。『持ち帰れるのは五キログラム以上、一人一尾』という制限があるんだ。このルールはね、小笠原の人たちがみんなで作ったもので、漁業組合から釣りをする人たちに発信しているんだ。」

父がそう言うのと、平賀さんは父の言葉を継ぐように話し始めた。

「ほかの島々では、どこかで『イシガキダイが釣れる』ということが分かったら、みんなで大物から小物まで、すべてを釣りつくしてしまったんだ。次から次に新しい釣場が見つけれられ、枯らされていった。同じ失敗を繰り返さないように、平成十三年に日本で初めてこのルールができたんだ。小さ

い魚は釣ったらすぐ放す、キャッチ・アンド・リリースと言うんだけど、そうすることで、持ち帰られる量が確実に少なくなり、釣場を枯らすことがないんだ。だから、小笠原では十年もの間イシガキダイが守られてきたんだ。」

「そうなんですか。せっかく釣ったのにもったいない気もするけど。釣った人は見つからないようにごまかして持っていったりしないんですか。取り締まるのも大変なんじゃないんですか。」

「ぼくは、ふと思ひ浮かんだ疑問を投げかけてみた。」

「いや、大変なんてことはないよ。ほとんどの人が自分からルールを守ろうとしているんだ。別に取り締まりなんてないんだよ。」

「へー。取り締まりがないのなら、ぼくだったら、小さいものでも釣れたものは、隠して持ってきちゃうかも。」

とぼくが言うと、笑いながら話を続けた。

「そもそもこのルールの始まりは、釣り師の声だったんだ。面白いように釣れていた時期に、『小笠原がイシガキダイにとって最後の楽園になるかもしれない。イシガキダイをみんなで守ろう。』と釣り師仲間運動が起こって、全国の釣り師から私たちのもとに声援が届いたんだ。そうした声に押される形でこのルールができたんだ。『結局、ここを守るのは他でもない自分たちなんだ。』ということ釣りを釣り師自身が気付いたんだ。だから、このルールは釣り師が自分たちでつくったルールといってもよいんだよ。だから、みんなで守るんだ。中には、『すべてキャッチ・アンド・リリースをしよう。』と主張している人たちもいるくらいなんだよ。」

この言葉を聞いて、ぼくは考え込んでしまった。

「おい、貴之！ お前の考えはどうなんだ。」

省吾の声でぼくは我に返った。みんなの視線がぼくに集まっている。



蓬莱根海岸（小笠原村ホームページより）

ホタルの里 (東大和市)

「こんな調子じゃ、四時までに学校にもどれない……。」

地域調べの当日、班長の僕は、おしゃべりをしながらのんびり歩く班員の様子にいらいらしていた。

班長の僕はコース係、佐藤さんは写真係、石田くんは記録係、西川さんは時計係、地域調べの係分担をして協力しようと決めたはずなのに、出だしからこの調子だ。

出発のチェックのときに、担任の先生から念を押された「時間を守るように。」という言葉が重くのしかかり、僕はあせってきた。時間が気になり早足になってしまふ僕と班員のみんなとの間に距離ができる。

「班長なのに、一人でどんどん先を歩いていくなんて、ひどい。」

と言う西川さんは、予定時間を十五分もオーバーしているのにみんなを急がせようともしない。

「そうよ、班行動がとれなくなるよね。」

と言う佐藤さんの声も聞こえる。

(佐藤さんの提案にみんなが賛成し、学校から遠く離れた野火止用水まで地域調べに行くことになったのに……。時間を気にしないばかりか、係の仕事までいい加減な二人の言動に腹がたった。記録係とはいえ、二人と一緒に歩いている石田くんもどうして急ごうとしないのだろう。)

目的地までの距離は、まだ相当ある。僕はしだいにこの先の班行動が不安になってきた。

班員との距離を感じながらも、三十分遅れでなんとか目的地の野火止用水に到着した。写真係の佐藤さんは、まだおしゃべりに夢中で写真を撮ろうともしない。

川越城主の松平伊豆守信綱により、承応四年に玉川上水から分水して作られた野火止用水は、昭和四十八年に流れが途絶えてしまったが、翌年の昭和四十九年、東京都歴史環境保全地域に

指定され、昭和五十九年に清流が復活した。

僕は、持ってきた事前学習の資料を読みながら、野火止用水を囲む木々の緑と用水の静かな流れに、少しだけ気持ち穏やかになるのを感じた。そのとき、佐藤さんと西川さんの二人が、

「うわー、すごい！水がきれい！」

「どこにホタルがいるの……。」

と騒々しい叫び声をあげ、あたりに響きわたる大声ではしゃぎ出した。僕は、穏やかな気持ちが一瞬に現実に引き戻されるのを感じた。

二人は、用水に近づいたかと思うと、係の仕事などそっちのけで、あちこちで水をすくい、遊び始めた。

そのときだった。

「静かにしないか。うるさいぞ！」

という物静かだが、重々しい声があたりに響いた。見ると、七十歳ほどのおじいさんが僕たちから少し離れた場所で絵を描いていた。佐藤さんと西川さんは、その声に驚き、用水から離れた。気まずい空気を感じた僕は、あせった。でも、とっさのことで何をしていいのかわからない。

佐藤さんと西川さんは、立ちすくんでいた。

すると、おじいさんは筆をもつ手を止め、

「君たちは、中学生だろう。こんな時間に何をしているんだ。」

と尋ねてきた。

「『ホタルの里』の地域調べに来ました。」

石田くんが答えるとおじいさんは、



野火止用水（東大和市ホームページより）

「そうか……。」

と言っつうなずいた。佐藤さんが、

「私の祖母は、昔、ここでホタルを見たそうです……。」
と言うと、おじいさんは、

「そのとおりだ。私も昔、ここに子どもを連れてホタルを見に来たものだ。闇夜やみよに浮かぶホタルの光を見て、夏の訪れを感じたものだ。しかし、環境が悪化し、ホタルは消えた……。」
と寂しげさびに話し出した。

ホタルの話になると、僕たちが真剣しんけんな表情になったのを察したのか、おじいさんは話を続けた。

「最近になってこの野火止用水にホタルを復活させるために、市の担当者だけではなく、用水を大事に思っている市民も協力している。このせせらぎにイケボタルの復活を願ったことだ。私もその市民の一人なのだよ。」

と言い、用水を見つめながら、

「ホタルの幼虫は、用水に住むカワニナ*だけでなく、モノアラガイやタニシなどを食べて成長し成虫となるそうだ。その大事な幼虫とカワニナ*がいる用水で遊んだり、大声を出して周りに迷惑めいわくをかけたりしてほしくなかったのだ、私は君たちに注意したのだよ。中学生なら、それぐらいのことを考えて行動できないとね……。」

そして、

「今度は、ホタルの飛び交う時間に来てみるという……。」
と言い添そえた。班員みんなで迷惑めいわくをかけたことを謝り、話を聞かせてくれたことにお礼を言うと、おじいさんは、優しくほほえみ、また静かに絵筆を動かした。

それからが、大変だった。西川さんは、取材の予定時間が三十分以上も遅れていることに気がつき、みんなに伝えた。佐藤さんは慌あわてて用水周辺の様子を写真に撮り、石田くんは用水周辺の様子をメモに取った。僕も、西川さんも二人を手伝ったが、時間がなかった。調査項目たうちょうを残したまま、学校に戻

* 「カワニナ」
東アジアの淡水域に棲む細長い巻貝の一種。

* 「モノアラガイ」
川・用水路・湖沼などの淡水底に生息する巻貝の一種。

ることになった。

帰り道での僕は気持ちが悪かった。こんな調査で地域調べのまとめができるのだろうか。おじいさんの言葉が重く響いた。

「中学生なら、それぐらいのことを考えて行動できないとね……。」

僕は、班長として、どれだけ班のことを考えて行動できたのだろうか。

数日後の夕方、僕は一人で『ホテルの里』に行ってみた。ちょうど日が沈んだ頃だった。

静かな清流の音を聞きながら、あたりを見つめていると小さな光がいくつもゆらりゆらりと立ちのぼった。美しい光だった。幻想的とはこのような光景をいうのだろうか。そのとき、ふいに、

「中村くんも来ていたのね……。」

という声が後ろから聞こえた。驚いて振り向くと、佐藤さんだった。側にはおばあさんがいた。

「おばあちゃんね、ホテルを見に来たの。この前の地域調べの取材のときは、昼間だったからホテルがみられなかったでしょう……。『ホテルの里』の地域調べだから、ホテルの写真を班新聞に載せたいと思って……。」

「そうか。そのためにわざわざ来たんだね。」

「この前は、勝手な行動ばかりしてごめんね。はしゃぎ過ぎて、おじいさんにしかられてしまったし……。」

「そのことは、もういいんだ。それよりも、班長の僕は、どれだけみんなのことを考えて行動したのだろうか……。」

「えっ……。」

佐藤さんは、僕の言葉に驚いた様子だった。

「地域調べの日、僕は、班長としての行動がとれなかった……。僕が時間や人への迷惑を考えて、みんなにちゃんと注意していれば、調査もしっかりできたし、学校に戻ってから先生に遅刻で注意さ

れることもなかったはずだ……。このままでは、班新聞作りはできないかもしれない……。それを聞いた佐藤さんは、少し間をおいてから、静かに話し出した。

「中村くん一人が、責任を感じることはないよ。自分勝手に行動した私たちがいけなかったのだから。」
ホタルの光が闇夜にゆっくりと円を描いた。佐藤さんは続けて話し出した。

「地域調べの班新聞は、この前のおじいさんから聞いた話も記事にして、みんなで協力してやればできよ。うちのおばあちゃんから昔の話も聞けるし……。クラスで一番の班新聞を作ろうよ。」
そのとき、草むらから一筋の光が舞い上がった。

「あっ、またホタルの光……。きれいなね……。」
佐藤さんがつぶやいた。

（みんなで協力して、クラスで一番の班新聞を作る……。）

僕は、舞い上がったホタルの光を見つめながら、もう一度、班長として頑張^{がんば}ってみようと心に決めた。

（菅野 由紀子 作）



野火止用水（東大和市ホームページより）

第二章 郷土資料の活用

こまった ちゅんきち (福生市)

一 ねらい

身の回りを整え、気持ちのよい生活をしようとする態度を養う。

二 資料選定の理由

・本資料は、福生市柳山公園のけやきの木を題材とした創作資料である。低学年の児童は、擬人化されたすずめの気持ちに、自分の気持ちを重ね合わせて考えることができるであろう。

・低学年の時期に身に付けた基本的な生活習慣は、その後の学校生活、ひいては生涯にわたってあらゆるものの基盤となり、気力、活力のあふれた生活をする上で欠くことのできないものとなる。身の回りを整理整頓していなくて困るちゅんきちの気持ちを、自分とのかかわりで考えさせる。身の回りを整え、気持ちのよい生活を送っているちゅんたを見て、その大切さに気付くちゅんきちの思いに共感させたい。

三 指導上の留意点と工夫

・展開後段では、場面・対象を広げ、主体的に自分の生活を振り返らせる。ワークシートや心のノートの活用などの工夫をして、身の回りを整え、気持ちのよい生活をしようとする態度を養っていきたい。

・生活指導で行う身の回りの整理整頓(自分の道具箱、ロッカー、筆箱など)について、様々な場面における指導の積み重ねが必要である。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
<p>1 身の回りの整理整頓について思い起こす。</p> <p>○ 道具箱は整理整頓されているか。</p>	<p>・ねらいとする価値を自分とのかかわりで考えられるように、具体的な物を提示する。</p>
<p>2 資料「こまった ちゅんきち」を読んで、話し合う。</p> <p>(1) ちゅんきちはどんな気持ちで、家を飛び出したか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あそびたい。 ・かたづけは、きれい。 ・めんどくさい。 <p>(2) 種が見つからず、お日さまが沈んでしまったとき、ちゅんきちはどんな思いだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうしよう。ちゅんたくんが待っている。 ・ちゅんたくん、おこっているかな。 ・無くなっていたらどうしよう。 ・借りた物はちゃんとしまっておけば良かった。 ・こんなに部屋をめちゃくちゃにしていなければよかった。 <p>(3) ちゅんきちくんはどんなことを考えて、急いで家に帰り片づけ始めたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ちゅんたくんみたいにぼくもきれいにしておこう。 ・ちゅんたくんのへやは気持ちがよかったな。 ・きれいに片づけておけば困らないな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・片づけを進んでしないちゅんきちの思いを自分とのかかわりで考えさせる。ちゅんきちに共感し、片づけは大切なことではあるが、実行するのは簡単ではない気持ちについて考えさせる。 ・ちゅんきちの困る気持ちを多様に考えることで、発問(3)のねらいとする価値のよさ・大切さを理解する発問につなげる。 ・ちゅんきちに共感し、身の回りを整え、気持ちのよい生活をしようとするについて考えさせる。
<p>3 自分の生活を振り返って発表し合う。</p> <p>○ 散らかしておいて困ったことはあるか。整理整頓しておいてよかったことはあるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを用いて振り返らせる。 ・心のノートを活用してもよい。
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

すいぞくえんの なかよし（江戸川区）

一 ねらい

友達と仲良くし、助け合おうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

- ・東京都立葛西臨海水族園は、多くの人々に親しまれている施設である。水族園で展示されているクマノミとイソギンチャクの共生関係から友情の視点を得て、子供が共感しやすいよう、寓話化を図った。

- ・クマノミに共感させることを通して、友達への優しさや友達からの行為に対するうれしさ、助け合うこととの大切さを実感させたい。

三 指導上の留意点と工夫

- ・クマノミとイソギンチャクの共生関係については、必要に応じて、導入で写真等を用いて説明してもよい。
- ・イソギンチャクへの感謝の気持ちが多く出てくることとが予想されるが、クマノミも、イソギンチャクのために冒険の話をおかせたり、魚を追いかけていたりしていることをおさえ、お互いに仲良く助け合っていることに気付かせたい。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
<p>1 友達と一緒にいて、よかったと感じた経験を発表し合う。</p> <p>○ 「友達と一緒によかったな、楽しかったな」と思ったことはあるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達との楽しい経験を思い浮かべること、価値への方向付けを行う。
<p>2 資料「すいぞくえんの なかよし」を読んで、話し合う。</p> <p>(1) 冒険の話をするクマノミくんは、どんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イソギンチャクさんに喜んでほしいな。 ・楽しみにしてっていてくれて、うれしいな。 <p>(2) イソギンチャクさんに、「だいじょうぶ。だいじょうぶ。」と言ったクマノミくんはどんな気持ちだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心配しないで。 ・イソギンチャクさんが、ぼくの話を楽しみにしてくれているから、行こう。 <p>(3) イソギンチャクさんにほおずりをしたクマノミくんの心の中はどんなだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これからも、仲良くしようね。 ・また、お話をするからね。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クマノミのイソギンチャクに対する友情の場面であることをおさえる。 ・イソギンチャクに喜んでもらうクマノミに共感させ、友情に触れる。 ・ワークシートを用意し、クマノミからイソギンチャクへの手紙を書かせてもよい。
<p>3 自分の生活を振り返る。</p> <p>○ 今までに、友達のことを思って何かをしたことはあるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・導入では、主として友達から「してもらったこと」に対する経験を思い浮かべるのに対し、自分から友達のためにどんなことをしたのかを振り返らせることで、その相互関係を意識させる。
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

絵手紙のメッセージ（狛江市）

一 ねらい

日ごろからお世話になっている人に、感謝しようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・ 狛江市は、絵手紙を描くことが非常に盛んな地域である。絵手紙コンクールや親子で行う絵手紙サミットなどの開催をはじめ、本市を走るコミュニティバス（こまバス）には、「絵手紙発祥の地 狛江」とかかれ、車内にも絵手紙が季節ごとに掲載されている。

・ 本資料は、学校にボランティアとして畑の手伝いをしに来る地域の方に、主人公が感謝の気持ちを絵手紙に込めて表現する話である。どの学校においても、学校を支えてくれる地域の方々が多くいる。本資料を通して自分たちのために善意を寄せてくれる地域の方々へ気付き、感謝する心情を育てていきたい。

三 指導上の留意点と工夫

・ 実際の絵手紙などを準備し、導入などで提示することで児童に資料についての関心をもたせる。

・ 学校を支えてくれる方が多くいて、いろいろな活動に携わってくれていることを知らせることによって、地域の方々に感謝する心情を育てたい。そのために地域の方を実際にゲストティーチャーとして招き、活動内容や思いについてお話をさせていただけるようにしたい。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 絵手紙を見て、資料に興味をもつ。 ○ これは何のために描かれた絵か分かりますか。	・ 絵手紙を提示し簡単に説明する。
2 資料「絵手紙のメッセージ」を読んで、話し合う。 (1) 5月にトマトの苗を植えたとき、まさひろはどんな気持ちだったか。 ・ トマトが元気に育ってほしい。 ・ たくさんのトマトができてほしい。 ・ おいしいトマトができるといいなあ。 (2) 小松さんから草取りの話聞いたとき、まさひろはどんな気持ちだったか。 ・ いろいろな草から栄養をとられてしまうんだ。 ・ 小松さんは、トマトが元気よく育っているか心配なんだ。 ・ ぼくたちのために学校に来てくれて、トマトの世話をしてくれてありがとう。 ・ 小松さんのおかげで、トマトが元気よく育ってくれてうれしい。 (3) 絵手紙を描いているまさひろはどんな気持ちだったか。 ・ トマトの絵を上手に描いて、ありがとうの気持ちを込めよう。 ・ ぼくの気持ちが小松さんに伝わるかな。	・ トマトの苗を植えるときの、まさひろの気持ちに共感させる。 ・ 小松さんがたまに学校に来てトマトの世話をしてくれていることに気付かせるとともに、その行為が小松さんの善意からであることをしっかりと押さえ発問(3)につなげる。 ・ まさひろの小松さんへの感謝の思いに共感させ、どんな気持ちで絵手紙に向かっているかを考えさせる。
3 自分の生活を振り返る。 ○ 学校を支えてくれている人にはどんな人たちがいるか。ゲストティーチャーの話を聞く。	・ できれば地域の方をゲストティーチャーとして呼び出して、学校や児童に対する思いを聞かせる。
4 教師の説話を聞く。	

ぬくもりの きょうしつ (檜原村)

一 ねらい

みんなで使う公共物を大切にしようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・檜原村は、学校や図書館などの木質化を進めている。村の山で育った木材を使い、村の大工さんが子供たちのために腕をふるう。教室の児童用の机、椅子だけでなく、床、壁、ロッカーなども木でつくられている。村全体が、子供たちを愛情一杯に大切に育てていることが伝わってくる。

・公共物には、人の思いが込められている。不特定多数の人の利便のため、楽しみのため、癒しのためなど、設置者の思いがそこにある。また、それは利用者の願いでもある。その思いに気付く指導をしなれば、心から公共物を大切にしようとする子供は育たない。

・資料は、木質化された教室に、温かな村の人の心が感じ取れる。設置者の思いに気付き、大切に使用しているみんなの思いに気付き、自分も主体的に公共物を大切にしていこうとする心情を育てたい。

三 指導上の留意点と工夫

・導入の場面では、具体的な学校生活の場面から公共物を想起させ、自分とのかかわりで考えさせる。

・展開後段では、身の回りの公共物にどのようなものがあるかと場面・対象を広げて、具体的に振り返らせるようにする。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 学校の中の公共物を思い浮かべる。 ○ みんなで使うものには、どんなものがあるか。	・ねらいとする価値に目を向けさせ、自分とのかかわりで考えられるようにする。
2 資料「ぬくもりの きょうしつ」を読んで、話し合う。 (1) どきっとして返事ができなかった時のゆうたの気持ちはどんなだったか。 ・悪いことだ。 ・急に言われてびっくりした。 ・いやだと言ったら、一緒に遊んでももらえなくなる。 (2) ゆうたは、どんな思いで「だめだよ。」とはっきり言ったのか。 ・先生にしかられるよ。 ・大工さんが一生懸命に作ってくれたんだから。 ・村の人がつくった特別なものだから大切にしくちやいけない。 ・学校みんなが今までも大切に使ってきたんだから、自分たちも大切にしくちや。 (3) 山の木は、ゆうたにどのようなことを話しかけているのだろうか。 ・かんとくんを止めてくれてありがとう。 ・一生懸命にそうじをしてくれてありがとう。 ・大切に使ってくれてうれしいよ。 ・これからも大事にしてね。	・悪いことだと分かっているけど、態度に表せないゆうたの気持ちを考える。 ・木の教室を自分たちに用意してくれた人々の気持ちやそれを大切に使ってきたみんなの気持ちをもとに、公共物を大切にすることを考えて考えさせる。 ・公共物を大切にすることを山のメッセージにして考えさせる。
3 自分の生活を振り返って発表し合う。 ○ みんなで使うものにはどんなものがあるか。それらを大切に使うことができているか考えてみよう。	・学校以外に図書館、駅、児童館、道路等、公共の場にある物に広げる。
4 教師の説話を聞く。	

オオカミのおんがえし（日の出町）

一 ねらい

相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、「日の出町むかしばなし」として西多摩郡日の出町に古くから伝わる昔話を出典に改作したものである。

・ヤマドリの骨がのどに刺さって困っているオオカミを、恐れを捨て温かい心で助けてあげたコウバあさんの言動に着目させ、思いやりの大切さを考えさせたい。

・思いやりの心は無償のものである。しかし、最後にオオカミからの恩返しがあったことに着目させ、思いやりの心は思いやる方も気持ちが良いことに気付かせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・各発問で、コウバあさんの気持ちに共感できるように工夫する。「これ、オオカミ。わたしの手をかまなければ、のどのほねをとってやるぞ。どうだ。」に着目した補助発問を用意しておき、人の心の温かさがどのような力をもつのかについて考えを深めさせた。

・話の内容が理解できるように、日の出町の様子を写した写真や地図を用意し、導入で生かす。
・オオカミとコウバあさんのお面を用意し、登場人物になりきって役割演技をさせるのも効果的である。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 日の出町の昔話であることを知り、資料に興味をもつ。 ○ 日の出町はどこなところか知っているか。	・地図や写真を用意し、資料への導入を図る。
2 資料「オオカミのおんがえし」を読んで、話し合う。 (1) くるしそうなオオカミを見つけたとき、コウバあさんはどんな気持ちになったか。 ・かわいそうだけど、オオカミはこわい。 ・助けてあげないと死んでしまうかもしれない。 (2) 「これ、オオカミ。わたしの手をかまなければ、のどのほねをとってやるぞ。どうだ。」と言ったときのコウバあさんの気持ちはどんなだったか。 ・オオカミだって話せば人間の気持ちが伝わるはずだ。 ・こわいけれど、苦しんでいるオオカミを助けてあげたい。 <補助発問>コウバあさんの言葉を聞いたときのオオカミの気持ちはどんなだったか。 ・くるしいよ。早く助けて。 ・怖がらせていた僕なのに、助けてくれるなんてうれしい。 (3) オオカミからのお礼を見て、コウバあさんはどんな気持ちになったか。 ・オオカミにも私の心が伝わったんだな。 ・助けてもらったお礼をするなんて、オオカミも優しいな。 ・優しい心は相手だけでなく自分の心を温かくする。	・オオカミの緊急事態に直面したコウバあさんの心の揺れに着目させる。 ・コウバあさんとオオカミに分かれて役割演技をさせ、それぞれの立場になりきった発言をさせる。
3 自分の生活を振り返る。 ○ コウバあさんのように、相手の気持ちを考えて親切にしたことはあるか。	・場面や対象を広げてから考えさせる。
4 教師の説話を聞く。	

大鵬土俵（西東京市）

一 ねらい

わたしたちの生活が、人々の協力や助け合いで成り立っていることを理解し、感謝する心を育てる。

二 資料選定の理由

・わたしたちは、様々な人に支えられ、助けられながら生きている。日ごろお世話になっている人々の存在に気付く、尊敬や感謝の気持ちをもって、それを具体的な行動に表すことは、よりよい人間関係を築いていく上で重要なことである。そして、日ごろお世話になっている人々への尊敬・感謝の気持ちは郷土のために尽くした人々へ、ひいては郷土愛へと発展していくものと思われる。

・本資料は、わんぱくずもうに参加する主人公が、本物の土俵を地域の人々が守り続けていることを知り、感謝の気持ちをもつようになる。その主人公の心の動きを追うことで、児童に感謝について考えさせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・田無神社の宮司は、すもうに最も思い入れのある人ということで、大鵬親方に土俵の命名をお願いした。すると大鵬親方自らが、自分の四股名である「大鵬」という名前を命名した。
・地域の神社に本物の土俵があれば、その話題に触れたい。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 本物の土俵の写真を見て、思ったことを話し合う。 ・かたそうだな。 ・のぼってみたい。	・「土の土俵」のカラー写真を用意し、どのように造るのかを説明する。
2 資料「大鵬土俵」を読んで、話し合う。 (1) わんぱくずもうが、土でできた土俵で行われることを知った「ぼく」は、どう思ったのでしょうか。 ・かたくて痛いからいやだなあ。 ・どうしてマットの土俵じゃないのだろう。 (2) 土俵を守っている人々がいることを知った「ぼく」は、どう思ったのでしょうか。 ・知らなかった。 ・土俵を守るのは、大変なことなんだ。 ・ぼくたちのために守ってくれているんだ。 (3) 土俵に込められた願いを知った「ぼく」は、どう思ったのでしょうか。 ・今度から土俵を大切にしよう。 ・大鵬土俵ですもうをすることが楽しみだ。	・本物の土俵に対する「ぼく」の気持ち感じ取らせる。 ・大鵬親方や地域の人々の思いや願いを考えさせる。 ・「ぼく」の気持ちが、感謝の気持ちへと変化していく様子を感じ取らせる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ みんなの生活を支えている人に、「ありがとう」と言いたい人はいるか。それは、どうしてか。 ・主事さん。いつも学校を掃除してくれているから。 ・おまわりさん。町の安全を守っているから。	・自分の生活を支えている人々の対象を広げて考えさせる。
4 教師の説話を聞く。	

二時間店員（板橋区）

一 ねらい

働くことの大切さを知り、進んで働くこうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

- ・板橋区民にとって親しみのある商店街を題材に取り上げることで、資料に関心をもたせたい。
- ・店員を体験することを通して、働く楽しさやうれしさを感じることができるとして、体験活動を題材にすることが有効であると思い、取り上げた。

・板橋区の小学校で実際に行っている総合的な学習の時間での活動を取り上げた。他校でも似たような学習活動を想起し、道徳と他教科・領域との関連を図ることができるとは思わないかと考え題材にした。

三 指導上の留意点と工夫

- ・クラスの仕事について問う導入から、「働くこと」について話し合うことを意識させる。
- ・やる気がなくなったが、お店の人のアドバイスを聞いて気持ちが変わった主人公を通して、進んで働くことの大切さに気付かせる。
- ・展開後段では、当番活動や、係活動や、お手伝いなどの自分たちの仕事に結び付けるために、資料からはなれて振り返らせる。
- ・終末では、日ごろの当番活動や、係活動での頑張りについて触れ、実践意欲につなげたい。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
<p>1 仕事について話し合う。</p> <p>○ クラスの仕事にはどんなものがあるか。</p>	<p>・価値への方向付けをする。</p>
<p>2 資料「二時間店員」を読んで、話し合う。</p> <p>(1) たたむのがいやになってきたとき、ゆか子はどんなことを考えていたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あきたけど、たん当になったんだから頑張ろう。 ・やっぱりケーキ屋さんで働きたかったな。やる気がない。 <p>(2) たたみ方を工夫し始めたゆか子は、どんなことを考えながら働いたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうしたら買いたいと思ってもらえるかな。 ・あやかさんと協力して頑張ろう。 ・はじめはやる気がなかったけど、仕事が楽しくなってきたな。 <p>(3) にっこりしたとき、ゆか子はどんなことを思ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いやになったけど、頑張ってよかった。 ・頑張ったから満足だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり乗り気ではないゆか子に共感させる。 ・乗り気ではなかった時の気持ちにも触れ、それでも頑張ろうと思った気持ちを考えさせる。 ・進んで働くこうというゆか子の思いを考えさせる。 ・達成感や満足感に気付かせ、感じ取らせる。
<p>3 自分たちの生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ みんなのために働いてよかったなと思ったことはあるか。またそのときの気持ちはどうだったか。</p>	<p>・進んで働くことの大切さを押さえる。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

けんたのじまん(利島村)

一 ねらい

力を合わせて仕事をするこの大切さを理解し、進んでみんなのために働こうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・利島は、東京から百四十キロメートル離れ、大島と新島の間に位置し、お椀をひっくり返したような形の島である。利島小中学校は小・中併設校で、平成二十一年度は、小中合わせて十三名が通っている。学校行事などは合同で行われる。

・本資料の主人公のけんたは、道そうじに遅れてしまうことを理由に頭が痛いと言ってサボろうとする。しかし母親に行くように強く言われ、渋々道そうじの場所に向かう。道そうじが終わったあと、観光客が「島にゴミが落ちてなくて、気持ちがいいですね。」と言ったのを聞いたとき、道そうじをやってよかったと感じる。本資料を通じて、普段の学校生活でも清掃活動や当番活動などを行う機会があるが、意欲的に取り組むときの気持ちを考えさせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・資料に載せた写真や地図を見て、利島について関心をもたせる。
 ・本資料の主人公の気持ちに共感させ、身近な係活動や当番活動、清掃活動への意欲へとつなげる。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 利島の写真や地図を見せることで、資料に興味をもつ。 ○ 東京にある島ですが、どこにあるか地図で調べましょう。	・利島の写真や地図を提示し簡単に島の様子を説明する。
2 資料「けんたのじまん」を読んで、話し合う。 (1) しぶしぶ家を出たけんたは、どんな気持ちだったか。 ・遅れて道そうじに参加するのはいやだ。 ・頭が痛いし、まだ眠いので道そうじをする気にならない。 ・仕方がないから、道そうじに行こう。 (2) 遅れて道そうじに参加したけんたは、どんな気持ちだったか。 ・遅れてでも行かなくては。 ・みんなはどんな気持ちで、ぼくを見ているのかな。 ・寝過ごしたのはぼくだから、怒られても仕方がないかな。 (3) 観光客が「島にゴミが落ちてなくて、気持ちがいいですね。」と言ったのを聞いたけんたはどんな気持ちだったか。 ・道そうじをやって、観光客が喜んでくれてうれしい。 ・きれいになった道を振り返って見て、すっきりした。	・しぶしぶ道そうじの場所に向かうけんたの気持ちに共感させる。 ・遅れて道そうじに参加するけんたの気持ちに共感させる。 ・しぶしぶ道そうじの場所へ向かった時の気持ちと比較させながら、道そうじを終えた気持ちを考えさせる。
3 自分の生活を振り返る。 ○ 学校生活や地域の活動で、みんなのために進んで活動したことはあったか。そのときどんな気持ちだったか。 ・クラスやみんなのために、張り切ってやっていた。 ・順番だったり、自分で決めた係だったりするし、みんなもやっていた。	・ワークシートに今までの体験を記入させる。 ・普段の子供たちの活動から意欲的に活動することについて話し、今後の意欲につなげる。
4 教師の説話を聞く。	

だって家族だもの (神津島村)

一 ねらい

家庭生活により積極的にかかわり、家族みんなで協力し合っって楽しい家庭をつくろうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・神津島は、伊豆諸島のほぼ中間に位置し、白い砂浜と入り江、緑豊かな山と変化に富んだ美しい島である。海の水質と透明度もすばらしく、釣りやダイビングなどのマリレジャーも盛んである。漁業、農業、観光業が主産業で民宿の数も多い。

・本資料では、家族の一員として積極的に家の仕事を手伝う主人公の姿が描かれている。一生懸命に働く家の人の姿を見た主人公がどんな気持ちをもったのかを考えることを通して、家族みんなが協力し合っっていこうとする心情を育てていきたい。

三 指導上の留意点と工夫

・導入では、この資料の舞台となっている「神津島」の紹介を行う。また、釣りやダイビングが盛んで観光客が多いことや「民宿」をおさえることで、資料への導入とする。

・主人公「かずき」の葛藤や心の変化を共感的に考えさせる。

・展開後段では、これまでの家族とのかかわり方や手伝いをした経験を振り返らせる。また、その時の気持ちも合わせて想起させることで、よりよい家庭をつくっていこうとする心情を深めさせる。

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 神津島の写真や地図を見ること、民宿の説明をきくことで、資料に興味をもつ。	・写真や地図を用いる。資料の舞台である「民宿」の説明を行う。
2 資料「だって家族だもの」を読んで、話し合う。 (1) かずきは遊びに行くとき、走りながら、どんなことを考えていたか。 ・ゆうまくんと何をして遊ぼうかな。楽しみだな。 ・今日は手伝いをしなくてもだいじょうぶだ。 ・家にもどって手伝いをしたほうがいいかな。 ・早く遊びをきりあげて家に帰ろう。 (2) かずきはどんな気持ちで忙しく働く家族をじっと見つめていたか。 ・おこられるかもしれない。 ・もう少し早く帰ってくればよかった。 ・どうして手伝ってと言わなかったの。 ・お父さん、お母さん、ごめんなさい。 ・家族のためにこれから手伝うぞ。 (3) かずきは、お客さんに笑顔を返しながらどんな気持ちをもったか。 ・当たり前だよ。家族なんだから。 ・家族の役に立つのは、うれしいことだなあ。 ・また、お手伝い頑張るぞ。	・友達と遊ぶ前のうきうきした心の中に、家のことがちょっと引っかかっているかずきの気持ちに共感させる。 ・主人公の心情をより深く考えさせる。補助発問や問い返しにより、多様な考えを引き出すことでねらいにせまる。 ・家の人だけでなく、お客さんにも認め褒めてもらった喜びをおさえる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今まで自ら進んで家族のために何かしたことがあるか。それはどんな気持ちからか。	・毎日決められている手伝いではなく、自発的なかかわりの体験を想起させたい。そのために「自ら進んで」「どんな気持ち」を強調して発問する。
4 教師の説話を聞く。	

北斎通り (墨田区)

一 ねらい
我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心情を育てる。

二 資料選定の理由

- ・葛飾北斎は、墨田区で生まれた浮世絵の絵師である。北斎の作品は、海外でも多くの芸術家に影響を与えた。
- ・墨田区の「北斎通り」には、街路灯に北斎の作品が飾られ、紹介されている。
- ・北斎の作品には、江戸の人々の様子が生き生きと描かれている。また、四季を感じさせる壮大な自然を描いたものも多い。
- ・主人公のはるかに共感し、人々の生活を愛し、自然を愛した北斎について考えることで、我が国のよさをやすばらしさにあらためて注目し、国を愛する心情を育てたい。

三 指導上の留意点と工夫

- ・北斎の作品については、墨田区のホームページに紹介されているので、閲覧すると参考になる。
- ・北斎についての理解だけにとどまるのではなく、北斎の作品を通して、我が国のよさを見つめさせるようにする。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
<p>1 資料に興味をもつ。</p> <p>○ この絵を見たことがありますか。また、この絵を見て、どんなことを感じましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・北斎の作品（挿絵など）を提示し、資料への興味を高める。
<p>2 資料「北斎通り」を読んで、話し合う。</p> <p>(1) 葛飾北斎が、6歳から90歳まで絵をかき続けたことを聞いたはるかは、どんなことを思ったでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すごいな。 ・絵が大好きだったんだな。 ・どれくらいの数の絵をかいたのかな。 <p>(2) お父さんから、隅田川の絵を教えてもらったはるかは、どんな気持ちになったでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔の隅田川はこんな様子だったんだ。 ・200年前にもあったなんて、不思議だな。 <p>(3) 「北斎は、日本の風景や人々の様子を、たくさんかいたんだよ。」とお父さんに言われたはるかは、どんなことを考えたでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本のすばらしい自然を、みんなに伝えたかったのかな。 ・自然や人々の暮らしの様子が好きだったのかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・北斎の、絵をかくことへの思いを想像することで、発問(2)や発問(3)へとつなげる。 ・なぜ、北斎が人々の様子や富士山をたくさんかいたのか、北斎がえがいた日本の自然の素晴らしさとはどんなものか、という考えを導くようにする。
<p>3 自分の生活を振り返る。</p> <p>○ 日本で、自分が好きなところやものは何か。また、どうして好きなのか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの自然や人々の様子について考えさせるようにする。 ・自然や日常の中でのもの、または民俗性など幅広く扱う。
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

より良い物を目指して（足立区）

一 ねらい
 探究心をもって、進んで新しいものを求めようと
 する心情を育てる。

二 資料選定の理由

・江戸刺繍は、現在、東京都が指定する伝統工芸品である。その歴史は古く、飛鳥時代から続いており、着物に絹糸で刺繍をする技術である。特に決まった地域で作られているというのではないが、着物を染めた後にきれいな水で着物を洗う作業があるため、現在でも足立区や葛飾区などの川沿いに職人が多くいる。
 ・本資料では、日本の文化を知り、そのよさについて考えさせたい。さらに、現在も継承されている日本の文化を時代に合わせて変化させていくことについて考えさせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・導入では、実際の作品や作業の様子を映像資料等を用いて提示することによって、資料への興味・関心を高める。
 ・自分の生活を振り返る場面では、興味をもって追求してみたいことを問う。

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 江戸刺繍という刺繍があることを知り、資料へ興味をもつ。 ○ 東京都には江戸刺繍があることを知っていますか。	・児童が江戸刺繍について理解できるように、作品の写真と実際の作業の様子の映像を提示し、導入を図る。
2 資料「より良い物を目指して」を読んで、話し合う。 (1) 江戸刺繍の作品作りのために、雑貨屋さんや手芸店に通う母はどんなことを思っていたのだろうか。 ・いい材料があるかな。 ・もしなかったらどうしよう。 ・新しい作品を作りたい。 (2) 母はどんな思いから、家紋の刺繍を奥にしまったのだろうか。 ・悔しい。 ・新しいのを作ろう。 ・もしかしたら自分にはできないのかもしれない。 (3) 新しく作った作品が喜ばれているとき、母はどんなことを思っていたのだろうか。 ・自分の工夫が認められた。 ・これで多くの人に江戸刺繍を知ってもらえる。 ・自分のアイデアが喜ばれた。	・新しい作品を作ろうと意欲をもってその材料を探している母の気持ちに気付かせる。 ・アイデアを出して作った作品が納得のいく作品ではなかったときの、母の悔しい気持ちとあきらめようとしている気持ちに気付かせる。 ・江戸刺繍を多くの人に知ってもらえる喜びと自分のアイデアが認められた充実感に気付かせる。
3 自分の生活を振り返る ○ 興味をもって探究してみたいと思ったことはありますか。	・具体的な場面などを伝え、ワークシートに記入させる。
4 教師の説話を聞く	

いまやらねばいつできる
わしがやらねばたれがやる（小平市）

一 ねらい

自分で決めた目標は、困難や失敗にくじけず、粘り強くやり遂げようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・人は何歳になっても、自分の夢や希望をもつことで前向きに積極的に生きることができる。また、自分なりの目標を立て、自己実現を目指して生きることができると、充実した人生を送ることができる。しかし、困難な現実にくじけてしまうこともある。

・平櫛田中の生涯を通して、自分の立てた目標に向けてくじけずに希望と勇気をもって取り組み、その目標に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てていきたい。

三 指導上の留意点と工夫

・「鏡獅子」（東京国立近代美術館蔵）は、高さ二〇六cm。国立劇場にて一般公開している。
木彫に金箔などを施してあり、大きさも見た目もとても彫刻とは思えない作品である。
・小平市平櫛田中彫刻美術館・東京都小平市学園西町一―七―五
・「心のノート」の『目標に向かって生きる』のページを活用し、自分の夢や目標を確認し、実現するため大切なことを考えさせる。

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
<p>1 「鏡獅子」の写真を見て思ったことを発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すごくきれい。 ・今にも動き出しそう。 ・彫刻に見えない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カラーの「鏡獅子」の写真を用意する。できれば大きさが実感できるものがよい。
<p>2 資料「いまやらねばいつできる わしがやらねばたれがやる」を読んで、話し合う。</p> <p>(1) 田中は、どんな気持ちから「見本となるような作品を作りたい」と考えていたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これから彫刻を彫る人たちのために役に立ちたい。 ・日本の彫刻の素晴らしさを伝えていきたい。 <p>(2) 田中は、「鏡獅子」を作る途中でいくつもの困難にあったとき、どのようなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最後まで頑張るぞ。 ・やめたい、もうあきらめたい。 <p>(3) 主人公は、田中の生きざまからどのようなことを感じたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で決めたことは、困難なことがあっても最後までやり遂げることは大変だけど、やり切ることは素晴らしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・田中が目標を決めた時の気持ちを考えさせる。 ・困難に向かったとき、前向きな気持ちと挫折してしまいそうな気持ちの心の葛藤について、共感し考えさせる。 ・田中の思いを考え感じ取らせる。
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ 自分の夢や目標としていることはありますか、それに向けて努力していることはどんなことですか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「心のノート」『目標に向かって生きる』の「私の夢」に書かせる。
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

ロードレース大会の思い出(稲城市)

一 ねらい

互いに信頼し、学び合って友情を深め、よりよい
友達関係をつくらうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・稲城市では、毎年一月中旬頃、稲城中央公園総合グ
ラウンド及び周辺道路で市民ロードレース大会が行
われている。小学生から一般の大人まで約千五百人
が参加している大きな大会である。小学生の部では、
男子が多く参加し、特に地域の少年野球チームやサ
ッカーチームに所属している児童の参加が多い。
・本資料では、ロードレース大会に向けて、ライバル
同士である二人が互いに切磋琢磨し、共に高め合っ
ていく姿が描かれている。友達関係で悩むことがこ
れまで以上に増えることが予想される高学年の児童
にとって、友達同士の相互の信頼の下、互いに磨き
合い、高め合うような真の友情をはぐくんできくこ
とが大切である。

三 指導上の留意点と工夫

・導入の場面では、児童自身とのかかわりからねらい
とする価値について考えられるように方向付けをす
る。
・主人公である健太の心情を考える場面では、児童の
感じ方や考え方を多様に表現できるように導く。
・自分の生活を振り返る場面では、時間を十分に取り、
大切に扱う。じっくりと考えられるようワークシー
トに書かせることも有効である。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
<p>1 友達がいてよかったと思った経験を話し合う。 ○ これまで友達がいてよかったと思ったことにはどんなこと があるか。</p>	<p>・信頼、友情にかかわる体験を 思い出し、ねらいとする価値 への方向付けをする。</p>
<p>2 資料「ロードレース大会の思い出」を読んで、話し合う。 (1) 武志に「健太はもっと足が速いと思っていたよ。」と言われ、 うつむいてしまったときのぼくの気持ちはどうだったか。 ・武志にばかにされて嫌だ。 ・武志に負けるくらいならもう一緒に走りたくない。 (2) ぼくを心配して家に来た武志の言葉を聞いて、ぼくの心の中 はどうだったか。 ・武志はぼくのことを心配してくれていたんだ。 ・ぼくのおかげと思われていたなんて、思ってもみなかった。 ・武志と一緒に走りたくないと思ってしまうて悪かった。 (3) 表彰台に上った武志を見て、ぼくはどんな気持ちだったか。 ・武志に負けて悔しいけれど、武志のおかげでここまで頑張る ことができてよかった。 ・一緒にここまで頑張ってきた武志が入賞できてよかった。 ・ぼくたちはいいライバルだ。これからはいい関係でいたい。</p>	<p>・友達への信頼が揺らぐとき の気持ちを考えさせるよう にする。 ・友達へ不信感をもっていた ことに対する様々な感じ方 や考え方に気付かせるよう にする。 ・友達と認め合い、高め合い、 よりよい友情を築けたとき の気持ちに共感できるよう にする。</p>
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今までに、友達同士で高め合えたことや理解し合えたこと にはどんなことがあるか。</p>	<p>・今までの自分自身を振り返り、 友情を深められた経験に ついて場面を広げて考えら れるようにする。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

ふるさとの川(三鷹市)

一 ねらい

自然の偉大さを知り、自然環境を大切にしようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・多摩川の海岸段丘である国分寺崖線に沿って、野川が流れている。以前には緑の多かった国分寺、小金井、三鷹辺りも宅地開発により、都市化された。そんな中で、サケの稚魚を育てて野川に放流したり、ホタルの里をよみがえらせたりすることで、自然環境を守り、野川をきれいにしようとする活動が行われている。この資料も、実際にサケの稚魚を育てている学校の児童の体験をもとに作られている。

・他教科等との関連を生かし、資料理解を深めさせた。 「自然のすばらしさや不思議さ」は、私たちの身の回りにもたくさんある。それらに気付くこと、興味・関心をもつことから、自然を大切にしようという心情が育っていく。サケの卵のふ化や、母川回帰の本能に対する驚きから、野川の様子が気になりだしてくる主人公の心の動きに深く共感させることでねらいに迫っていききたい。

三 指導上の留意点と工夫

・児童が感じている「自然」や「環境」とはどのようなものか、また、自然の偉大さを感じるのはどのようなときなのか、その実態を把握しておく。

・季節の移り変わりや学校内外の自然環境の変化などをおりにふれて話し、身近な自然の営みに気が付く感性を育てたい。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 「自然ってすごいな」と思ったこと、または本を読んだり、テレビを見たりしたことなどを思い出して話し合う。	・サケについて、写真やビデオなど視覚に訴えるものを工夫する。
2 資料「ふるさとの川」を読んで、話し合う。 (1) 一番心に残ったことはどんなところでしたか。 ・サケの赤ちゃんが生まれたこと。 ・サケがまちがわずに自分の生まれた川に帰って来ること。 ・サケの赤ちゃんを放流すること。 ・野川のことが、急に気になりだしたこと。 (2) 秀雄は、サケの赤ちゃんがかえったとき、どんな気持ちだったのでしょうか。 (3) 秀雄は、放流した稚魚にいつまでも手をふっているとき、どんな気持ちだったのでしょうか。 (4) 秀雄は、どうして野川のことが気になりだしたのでしょうか。	・児童自身の思いが十分話されるようにする。 ・秀雄の気持ちになって考えることができるようにする。
3 自分の生活を振り返る。 ○ 最近、自分たちの身の回りの自然のことで、気になっていることはありませんか。	・直接体験がなければ、間接体験でもよいが、できるだけ身近なところから考えていくよう支援する。
4 教師の説話を聞く。	

ぼくたちのほこり（東大和市）

一 ねらい

学校の一員としての自覚をもち、みんなで協力して自分たちの学校をよりよくしていこうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・東大和市立第一小学校に実際に植えてあるイチョウの木を題材とした。樹齢九十年を越してもなお、地域の人が大切に世話をしている。また学校側も落ち葉拾いや銀杏拾いを学校の活動として児童に行わせ、地域と学校が連携してイチョウの木を大切に育てている。

・本資料では、はじめは銀杏拾いを嫌がる「順二」だったが、イチョウの木の病気を知り、お世話をする地域の人や先生たちの気持ちを理解していくにつれて、自分も学校の一員として、イチョウの木を大切にしていきたい、手本となる高学年を目指していく心に気付かせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・導入では、実際のイチョウの木の写真を提示することによって、資料への興味・関心を高める。
 ・中心発問の前にイチョウの木を掃除する写真を掲示し、児童に掃除の大変さを理解させる。
 ・自分の生活を振り返る場面では、ねらいに迫るため、自分の経験を振り返って、ワークシートに書かせる。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
<p>1 イチョウの木や銀杏について聞き、資料へ興味をもつ。 ○ イチョウの木を知っていますか。銀杏を知っていますか。</p>	<p>・児童がイチョウの木、銀杏について理解できるように写真を提示し、資料について関心をもたせる。</p>
<p>2 資料「ぼくたちのほこり」を読んで、話し合う。 (1) 順二に代わって銀杏を拾ってくれる聡を見て、順二はどんなことを考えましたか。 ・自分の代わりにしてもらって悪いな。 ・6年生はとてもえらいな。 ・どうして進んでできるのかな。 (2) 柵に入るのをやめたとき、順二はどのようなことを考えていましたか。 ・みんなで育てている。大事にしたい。 ・地域の人大切にしているから、中には入れない。 ・木はぼくたちのほこりだ。 (3) どのような気持ちから順二は早く学校に来ようと思ったのですか。 ・自分もしっかりした6年生になる。 ・自分がイチョウの木を守っていく。</p>	<p>・悪いという気持ちとなぜ拾ってくれるのかという疑問から聡君のイチョウの木への思いに気付かせる。 ・イチョウの木を大切に地域の人思いに気付かせる。 ・実際の作業の写真を提示することによって、掃除の大変さについて理解を深めさせる。 ・自分もイチョウの木を大切にしていこうと、自分が下級生にとって見本となる6年生になろうという思いに気付かせる。</p>
<p>3 自分の生活を振り返る。 ○ よい学校にするために行ったことはあるか。</p>	<p>・ワークシートに記入する。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

歴代横綱の碑(墨田区)

一 ねらい
 自己を見つめ、自分のよさを見つけ、個性を伸ばしていかうとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・ 中学一年生の時期は、自己理解をしたり、自分なりの生き方とは何かを考えたりするようになる。一方で、他人と比較し、自己を肯定的に捉えられず自己嫌悪に陥る場合もある。成長期のこの時期に、自己を受容し、自らのよさを伸ばしていかうとする態度を育てたい。

・ 本資料は、わんぱく相撲で鍛えた力を生かせずに、部活動の選択に迷い、周囲に流されそうな主人公の姿が描かれている。祖父や横田さんの助言に触れ、自分を見つめ、よさを生かそうとするようになる主人公の変容に着目させることで、個性を伸ばして生きることの大切さを考えさせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・ 「どの横綱にも、自分のよさを生かした決まり手がある」「吾日に三たび省みる」という横田さんや祖父の言葉に着目させ、自己を見つめ、個性を伸ばして生きることの大切さを考えさせるようにしたい。

・ 内容項目 1―(3)として、周囲に流されがちな主人公が自己決定できるようになるまでの変容に着目させて、自主自律の精神を養うことも考えられる。

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 部活動を選択したときの理由を発表する。 ・ サッカーが好きだから。友達と一緒にの部に、なんとなく。	・ 部活動を選択したときの理由を確認させることで資料への導入を図る。
2 資料「歴代横綱の碑」を読んで、話し合う。 (1) 相撲部入部をためらうのは、雄介のどんな気持ちからか。 ・ 和馬に冷やかされるから。 ・ この前の試合では一回戦敗退だから。 ・ 相撲部以外にも自分に合う部活動があるかもしれないから。 (2) 「どの横綱にも自分のよさを最大限に生かした決まり手がある。」の言葉を聞き、雄介はどんなことを考えたか。 ・ 横綱なんだから決め手があるのは当然だ。 ・ 横綱に限らず、その人ならではの決め手があると思う。 ・ 自分にも相撲に限らず「決め手」があるのだろうか。 (3) 「自分のよさには、もっと自信をもていい。」という祖父の言葉が雄介の心に、どのように響いたのか。 ・ 横綱たちが試練に打ち勝ち、自分に自信と誇りをもったように、自分のよさを大事にしたい。 ・ 相撲という自分の特技を生かさないのはもったいない。 ・ 周りに惑わされず、自分のよさを発揮したい。 ・ 相撲という自分のよさに自信をもていきたいと思った。	・ 周囲に流される主人公に着目させる。また、主人公が自分自身を見つめようとしないことにも気付かせる。 ・ 横綱だけではなく、だれにでもその人固有のよさがあることに気付かせる。 ・ 主人公の心の揺れに着目させ、ねらいについて深く考えさせる。 ・ 「吾日に三たび省みる」という祖父の言葉に言及し、より深く個性を伸ばして生きる大切さについて考えさせる。
3 友達のよいところを「心のノート」に記入し、互いのよさを発表し合う。 ・ 丁寧な文字が書け、連絡黒板係として信頼されている。 ・ バレー部員として頑張り、都大会進出を決めた。 ・ 漫画が上手で、雑誌に投稿して佳作となった。	・ 自分のよさは自分では分からないことが多いので、生徒相互の信頼関係を基盤に互いに指摘し合わせる。
4 教師の説話を聞く。 ・ 個性を伸ばすことが充実した生き方を追求することになることに気付かせる。	・ 教師自身の個性に言及しながら、よさを生かして生きることの大切さを語る。

心を届ける（小平市）

一 ねらい

友達との心のつながりを大切にし、お互いを励まし合い、高め合う態度を育てる。

二 資料選定の理由

・丸いポストは、次々に新しい四角いポストに置き換えられているが、小平市では、現在も丸いポストが使用されており、都内で最も多く残されている。

・現代の中学生の中には、メールでのコミュニケーションを多く用いている者もいるが、コミュニケーションにおいて大切なことは、速さだけではなく、相手を思いやる心だということを考えさせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・小平市の取組が、心のつながりを大切にしようとするものであることを理解させたい。それを踏まえて、相手の立場に立ってお互いを思いやる気持ちをもたせたい。

・メールなどで人間関係のトラブルが起こることは、生徒にとって日常の話題である。本資料を活用するに当たっては、自分にも起こりうる状況であるという考えさせたい。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 メールについて考える。 ○ どんなときにメールを使いますか。	・メールについて考えさせ、本時の学習への導入を図る。
2 資料「心を届ける」を読んで、話し合う。 (1) かおりとまいがけんかしてしまったのは、なぜか。 ・まいが、自分の悪さに気付かず、友達の悪口ばかり言うから。 ・かおりが、まいの話を聞かないから。 (2) かおりの母は、丸いポストからどんなことを伝えようとしていたのだろう。 ・人と人のつながりは心であること。 ・メールばかりがコミュニケーションではないこと。 (3) かおりは、親友とはどんなものと考えていたのだろうか。 ・心と心で通じ合っているもの。 ・けんかをして、すぐにお互いを認め合えるもの。	・メールでのトラブルが、お互いの思いやりのなさから起こることを、十分に理解できるようにする。 ・丸いポストの話が、人と人の心のつながりであることに気付かせる。 ・自分自身が親友とは何かを考えさせるきっかけとしたい。
3 まいに、心を込めた手紙を書く。 ・あなたの立場を分かってあげられなくてごめんなさい。まいの気持ちはよく分かるけど、同じように人の悪口を言うような人になってほしくない。 ・君はそんな悪口を言われるような人じゃないって、ぼくはよく分かっている。だから、いつでも正々堂々としてほしい。	・自分の親友が同じようなトラブルを抱えているというような設定を与える。
4 教師の説話を聞く。	・コミュニケーションの基本は、相手の立場に立って、相手を思いやることだと話す。

幻の梨(稲城市)

一 ねらい

様々な人の支えにより、現在の自分があるということに感謝し、応えようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・稲城の梨は、市場にはあまり出回らず梨園の直売所で売られているものがほとんどであり、家族や地域の協力で生産されている。このことを知っている人たちが、貴重な梨として贈り物にすることが多い。
 ・本資料は、梨園を営む川村さんが家族や地域の人に支えられて今があることを中学生の私に伝え、私が自分のことを振り返り祖母への感謝の気持ちをもつという内容である。中学生に自分も他の人の支えにより、今があることを気付かせることができる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

・人が生きていく上で、多くの人々の善意や支えにより日々の生活が成り立ち、それに対する感謝の気持ちをもちつことの大切さを理解させたい。
 ・感謝の気持ちの表し方は様々であるが、大事なことはその気持ちが相手に届くように素直に表すことだと気付かせたい。
 ・今までお世話になった方へ「お礼の手紙」を書いたり、保護者へのお礼のメッセージを書いたりするなどの取組に発展させる方法もある。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 お礼について考える。 ○ 人は、どんなときにお礼をするのだろうか。	・日常的な小さな出来事や、特別な出来事に対するお礼など、様々な場面を考える。
2 資料「幻の梨」を読んで、話し合う。 (1) 川村さんは、ご両親に梨を送るお得意さんにどんな特別な思いをもっていたらだろうか。 ・人として大事にしてほしい気持ちをもっていてよかった。 ・ご両親がとても喜ぶことが分かるからうれしい。 (2) 川村さんは、どうしてなるべく多くの人に自分の作った梨を食べてもらいたいのだろうか。 ・まわりの人に支えられながら今までやってこれたから、そのことへの感謝の気持ちを表していたかった。 ・おいしい梨を売ること、人が感謝の気持ちを伝えることにかかわれていると思うから。 (3) 私が、田舎のおばあちゃんに梨を送るのはどんなことに気付いたからだろうか。 ・自分がお世話になったことに気づき、その気持ちを伝えたいと思った。 ・感謝の気持ちを純粋に形や行動に示すことが大切なことに気付いたから。	・身近な感謝の気持ちの表し方を取り上げたい。 ・川村さんが、梨園を続けてこられたことに対する感謝の気持ちに重点をおきたい。 ・感謝の気持ちを素直に伝えることの大切さに重点をおきたい。
3 人とのかかわりの中で大切にしたい気持ちについて話し合う。 ・お世話になった方への感謝の気持ち。 ・感謝の気持ちを素直に伝えたいという気持ち。	・感謝すること、それを伝えることの大切さに気付かせたい。
4 教師の説話やお世話になった方への感謝の手紙を読む。	・教師が、あらかじめ手紙やメッセージを用意してもよい。 ・曲を流すのも効果的である。

最後の楽園を守れ（小笠原村）

- 一 ねらい
 きまりの意義を理解し、社会の秩序と規律を高め
 ていこうとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

- ・小笠原諸島は、本州から南に約一〇〇〇キロメートルに位置する太平洋上の島々で、豊かな自然が残されている。海洋資源も豊富で、釣り師にとっては、最後の楽園とも言われている。この海洋資源を守るため、全国の釣り師に小笠原母島漁業組合が後押しされる形で、日本初の釣魚採捕制限規則が平成十三年に母島で導入された。

- ・本資料は、移動教室のきまりについて話し合っている主人公が小笠原での体験を想起し、きまりの意義について自分のこととして考える姿が描かれている

三 指導上の留意点と工夫

- ・本資料の理解には、小笠原の自然についての理解が不可欠になるので、導入では、小笠原の自然について、写真などを提示しながら理解させたい。
- ・主人公が小笠原での体験から、「きまりは自分たちを守るためにある」ということを学んでいく姿が主人公の視点で描かれている。活用にあたっては、主人公の心情を共感的に追求させることによって、「進んできまりを守ろう」という気持ちをふくらませたい。

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 小笠原諸島の自然について知る。 ○ 小笠原諸島について知っていることを挙げてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・小笠原諸島について知り、資料への導入を図る。 ・写真など提示し、小笠原の自然のイメージをふくらませる。
2 資料「最後の楽園を守れ」を読んで、話し合う。 (1) 父親がせっかく釣ったイシガキダイを海に放してしまったのを見て、貴之はどんな気持ちになったのだろうか。 ・せっかく釣ったのにもったいない。 ・どうして、放すのだろうか。 (2) 「ここを守るのは、他でもない、自分たちなんだ。」という釣り師の言葉を貴之はどのように感じたのだろうか。 ・自分たちでルールをつくって守るのはすごいな。 ・取り締まりがないのに守られているのに驚いた。 ・ルールというのは自分たちを守るためにあるんだな。 (3) 「おい、貴之！ お前の考えはどうなんだ。」と省吾に言われた貴之は、どのような発言をするのだろうか。 ・自分たちで決めたルールはしっかり守ろうよ。 ・移動教室でみんなが楽しめるようなルールにしていきたいな。	<ul style="list-style-type: none"> ・貴之の戸惑いに共感させ、ルールがなければ、釣った魚は持ち帰りたいという自然な感情があることを気付かせたい。 ・貴之の驚きの中に、ルールの意義について学びとったことを気付かせたい。 ・貴之の考えを追求することによって、ルールを守っていこうとする意欲をふくらませる。
3 自分とのかかわりで考える。 ○ 「ルールがあってよかった。」と思った経験を話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のルールとのかかわりを想起させ、自分の問題として考えさせる。
4 本時の授業で学んだことをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「心のノート」の該当ページを読んで自らの思いを記入させ、本時のまとめをさせる。

ホテルの里（東大和市）

一 ねらい

集団の一員としての役割と責任を自覚し、協力し合おうとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・ 中学二年生の時期は、様々な集団の中で相互理解を深め、人間的な成長を遂げることを学ぶ時期である。集団生活では互いに人間関係を大切にするとともに、励まし合うという協力関係も大切である。そのため集団の規律を守り、集団の一員としての役割と責任を果たし、協力し合おうとする態度を育てたい。

・ 本資料は、集団の規律を守らない班員に注意することができず、班長としての自分の行動力のなさに落ち込む主人公が描かれている。「ホテルの里」で出会ったおじいさんの一言や班員からの励ましにより、新たな目標に向かって班長としての役割と責任を果たそうとする姿から、集団の一員として励まし合うという協力関係の大切さを考えさせたい。

三 指導上の留意点と工夫

・ 「中学生なら、それぐらいことを考えて行動できないとね……。」というおじいさんの一言から、班長としての自分を見つめ、責任を果たすことや協力し合うことの価値に気付いていくような発問を構成する。
・ 内容項目 2 | (3)として、資料後半の互いに励まし合う場面に着目させて、友情の尊さについての理解を深めさせることもできる。

四 展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1 班行動について考える。 ○ ホテルの里の写真や資料をもとに、ホテルについて知っていることを挙げてみよう。	・ 日常生活での出来事を想起させながら、展開に導くための雰囲気をつくる。
2 資料「ホテルの里」を読んで、話し合う。 (1) のんびり歩く班員の様子にいらいらしながらも、班長の中村くんはどうして注意しなかったのだろうか。 ・ 時間がかかっていることに、気付くだろうと思ったから。 ・ 腹が立っていたので、注意する気にもならなかったから。 (2) 「中学生なら、それぐらいことを考えて行動できないとね……。」というおじいさんの一言を中村くんはどう受け止めたのだろうか。 ・ 班長の自分にもあてはまる言葉だ。 ・ 班長として先のことを考えずに責任のない行動をとってしまった。 (3) 「みんなで協力してやればできるよ。」という佐藤さんの言葉を聞いて、中村くんはどんな気持ちになったのだろうか。 ・ 励まされ、落ち込んでいた気持ちが前向きになった。 ・ もう一度、班長として頑張ってみようと思った。	・ 班員の行動を批判するばかりで注意できない主人公の姿に着目させる。 ・ おじいさんの一言から、班長としての自覚のない自分の行動を振り返り、葛藤する主人公の心情に迫らせる。 ・ 新しい目標に向かって、班長としての役割と責任を果たそうと決意する主人公の前向きな姿勢に共感させる。
3 「心のノート」を活用して、集団の中の自分の役割について考え、発表し合う。 ・ 全体の立場から自分のすべきことを考え、行動する。 ・ 集団のきまりを守り、協力する。	・ 集団の一人としての責任を果たす行動を目指し、協力し合うための自分の役割について考えさせる。
4 教師の説話を聞く。 ・ 一人一人が輝く集団について話す。	・ 一人一人の役割と責任への自覚がよりよい集団を構成することに気付かせる。

作成協力者

(職名は平成22年3月現在)

《第4集》

平成21年度 道徳授業地区公開講座推進委員会

【小学校】

委員長	関口純一	豊島区立さくら小学校長
委員	武田淳	中野区立中野神明小学校主幹教諭
	安倍威	府中市立府中第十小学校主幹教諭
	大野寿久	国分寺市立第十小学校主幹教諭
	橋本ひろみ	世田谷区立松原小学校主任教諭
	鈴木裕子	町田市立忠生第一小学校主任教諭
	蜂須賀勲	西東京市立保谷第二小学校主任教諭
	山西香織	文京区立窪町小学校教諭
	遠藤信幸	足立区立弘道第一小学校教諭
	茂呂佳江	江戸川区立下鎌田西小学校教諭

【中学校】

委員長	山田佳子	大田区立馬込中学校長
委員	坂口幸恵	江戸川区立平井第二小学校長
	菅野由紀子	東久留米市立久留米中学校副校長
	松澤亮	東京都立桜修館中等教育学校主幹教諭
	小貝宏	江戸川区立南葛西第二中学校主任教諭
	篠塚浩幸	多摩市立青陵中学校主任教諭

なお、東京都教育委員会においては、次の者が本書の編集に当たった。

坂本和良	教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課長
相原雄三	教育庁指導部主任指導主事
大和義行	教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課統括指導主事
井尻郁夫	同 指導主事
前田元	同 指導主事
松永かおり	同 指導主事

平成21年度 東京都道德教育郷土資料集（第4集）

東京都教育委員会印刷者登録

平成21年度 第232号

平成22年3月19日

編集・発行 東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課

所在地 東京都新宿区西新宿2-8-1

電話番号 (03) 5320-6841

印刷会社 前田印刷株式会社



